

---

# 不幸な少年の冒険

フルム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸な少年の冒険

### 【Nコード】

N3367M

### 【作者名】

フルム

### 【あらすじ】

楽しみだった新しい高校生活。それなのに柳瀬渡は登校日初日に寝坊してしまった。小さな不幸から始まる少年の冒険。恋あり、笑いあり、涙なしの柳瀬渡の冒険譚！……この物語には主人公無双はありません。あらかじめご了承ください！……

ゝ事の始まりゝ（前書き）

初投稿です。生暖かい眼で見守ってください

ゝ事の始まりゝ

「ん……んっ」

壁に小さく切り抜かれたような窓から日光が差し込んでくる。その小さく切り抜かれた日光が柳瀬<sup>ヤナセ</sup> 渡<sup>ワタル</sup>の顔を直撃した。

渡は上体を起こすと大きく伸びをした。ついでにあくびをする。

「うん、気持ちのいい朝だ」

そう呟いて窓の外をのぞいてみる。そこには、

忙しそうなサラリーマンと既に真上までのぼった太陽があった。

……ん？

渡の思考が停止する。

今日は待ちに待った高校の入学式。昨日の夜も緊張で眠れなかったぐらいに楽しみにしていたのだ。誰かに言ったら笑われそうな理由で眠れなかったわけだが、それほどに高校というものが楽しみだった。

それなのに、

登校日初日に、

寝坊した。

渡は直感した。

そして絶望した。

「なんだってんだああゝ!!!!!!」

渡はいつもクラスの笑いものだった。

ドジだし、どこか抜けているし、臆病だし、背はちっこいし、制服はぶかぶかだし、丸眼鏡だし。

最後の方は関係ないと思うがクラス全員で渡を笑っていた。

いや笑っている本人たちにとってはただ見ているのが面白かったからちょっと弄っていただけだった。だが当の本人からしてみれば全く迷惑極まりない事であった。

何か行動を起こすたびに笑いが起き、皆が自分を指差して笑っている。

そんなクラスが渡は嫌いだった。

だから高校に期待していたのかもしれない。

だがいきなり始業式をサボったのだ。

本人にその意思はないとはいえサボった事には変わりない。

そのせいで自分はまたクラス全員から笑われることになるのだらう。

「はあ……」

ため息が出るのも仕方がないだろうと思う。

ため息をつくとき幸せが逃げるとか聞いた事があるがそんなことはどうでもいい。

ため息をつかないとやっていけないのだ。

そうしてひとしきりため息をついた後、暇になったので仕方なくそこらをぶらつく事にした。

もちろん学生の下校に被らない時間帯だ。

自分の不幸を呪いながら散歩コースを歩く。

散歩コースといっても自分の家を出てひたすら人気のなさそうな道を歩く事だ。

だから特に決まった道があるわけではない。

そのままぶらぶらと歩いていたらマンホールの所に通行止めの看板が置かれていた。

すぐそばでは工事中らしきおっちゃん達がそれらしい作業服を着て作業している。

戻っても何もすることは無いのでちょっとお邪魔する事にした。

「……失礼しまゝす」

掻き消えそうな小声で断りを入れつつ静かに通り過ぎようとする。  
マンホールの蓋が開いていることを確認しつつ、落ちたくねえよ  
な、と心の中でつぶやいた。  
そのとき、

「そのクソガキィ！ 工事中って看板が見えねえのか！！！」

すぐ隣の、どこかの組に入ってそうなヤクザっぽい人が大声で怒  
鳴った。

「ッ！ す、すみま……」

素直に謝ろうとしたのだがあまりに相手の声が大きすぎたため後  
ずさりしてしまう。

しかし、その脚をマンホールの蓋に引っ掛けてしまった。

（うわっ！あぶな！！）

渡はバランスを取って後ろに足をつけようとしたのだが、その脚  
がマンホールに入ってしまった。

重心を乗せていた足が見事にマンホールに入ってしまい、マンホ  
ールに吸い込まれる渡。

（！！？ つ！？）

無我夢中で手を伸ばしたが、その手は空を切り、渡はそのままマ  
ンホールに落ちていった。

ゝ事の始まりゝ（後書き）

感想とかいただけると励みになります。なんでもいいので気になったことをぶつけてください。

次からちゃんとファンタジーになるはず・・・



く神の気まぐれく（前書き）

自分の文章力の無さにうんざりする自分。

く神の気まぐれく

「はっ！」

視界がいきなりまぶしくなつてがばつと起きた渡。

視界に入つたものは、無かつた。

正確には真つ白だつたから何も眼に映らなかつた。

そんな白い空間の中にいる自分はなんだか場違いな気がした。

そんな空間でしばらく思考の整理をしていると後ろから声がかかつた。

「あら？　一番乗りで私の元にやってきたのは将来有望な若者か」

びつくりして振り返る。

そこには金髪巨乳童顔ロリ美少女が立っていた。

（かわいい、じゃねえか）

こんな緊急事態でもこんな事を思うことが出来る自分にまた少しだけがっかりする。

しかも自分はロリコンではない。自分は変な性癖を持ってしまうのだらうか、とショックを受けた。

それにしても……

「お前誰だ？」

率直な疑問だつた。

「あら、自己紹介がまだだったね」

そこで金髪（略）少女は一呼吸おいてから言った。

「私は神だ」

渡の思考がまた停止しそうになる。

こいつはバカか？

頭はいかれてないのか？

たぶん迷子になってしまって寂しさのあまり変な事を口走るようになってしまったのだろう。

「君、お母さんかお父さんはどうしたの？はぐれたの？」

渡はそう言っで金髪少女に手を差し伸べた。

「馬鹿にすんな！ 私は正真正銘の神様だ！！」

「いや、あんたみたいなロリータが神な訳がないでしょ。日本がそ  
オタク文化ういう文化で染まっていると思ったら大間違いだよ？」

すると金髪ロリータはさらに怒って、

「ざけんな、たかが人間ごときが！！ 貴様なんて私の力をもつて  
すれば命など無いぞ！！！！」

渡は金髪ロリータが本気で怒っているのので下手にこれ以上きれると手

がつけられないと思い、ひとまず金髪口リにあわせることにした。

「あーあーわかったよ。あなたは神様なんですよ？　で、その神様が私に何の御用でしょうか？」

明らかに馬鹿にされているのが分かる言動だったが、怒っていても始まらないのでとりあえず神はこらえる。

「……っ！　まあ分かればいいんだ……。本題に入るが、お前は今お前に置かれている状況をちゃんと分かっているか？」

渡はやはりこいつは頭がおかしいのかと思う。が、怒られては話が進まないので一応乗ることにした。

「状況って？　この白い空間の事か？」

「それも含めてだが……。その様子だと覚えていないようだな……」

神はそこで言葉を区切った。渡に考えさせる時間を置いてから、しかし渡が分からない素振りを見せるのではつきりといってやった。

「柳瀬渡。お前は死んだ」

……は？

渡には訳が分からなかった。

やはりこいつは頭がおかしいのかと思い、口を開こうとしたそのとき、

「うるさい！ 私は正常だ！ 正常に神だ！ 全く最近の若者は話を聞かんで困る……」

先を越された。渡は出鼻をくじかれたので仕方なく神に質問してみる。

「俺が死んだってのは、どういうことだ？ 俺は生きているじゃないか」

「違う。今のお前はただの残留思念だ。いわゆる魂というやつだな」

こいつの言っている事が全く分からない。そう考えていると様子で分かったのか彼女は丁寧に教えてくれた。

「お前はな、マンホールから真つ逆さまに落ちて死んだんだ。でかい声にビビッて蓋に足引つ掛けて、な」

そう言われて渡はだんだん頭が冴えてくるのが分かった。怒鳴られた時の感情、足を引つ掛けた時の恐怖、落ちるときの絶望感。

「その様子だと思い出したようだな」

「ああ……。俺って、死んだのか……？」

「ああ、死んだ」

彼女はぱつさりと切り捨てた。  
やりたいことはたくさんあった。高校に行くのが面倒くさくなっ

たけど、楽しみにしていたのも事実で、青春を謳歌してやる！なんて思ってたのに・・・

まだ15歳の、高校生になりきれなかった心には「死」というものが重すぎた。

「はは……俺死んだのか……ははっ」

乾いた笑みがこぼれてくる。死んだのは分かっているが認めたくない。

どうしようもない絶望感に潰されそうになっている時に彼女は言った。

「確かにお前はまだ高校生にもなっていない未熟な魂。死んだのは単なる不幸としか言いようがない。」

だがな、といって彼女は言葉を繋げた。

「お前には最高にツいているようだ。」

死んだのにツいているとは、どういうことだ？ と渡は首を傾げる。

「お前はな、私が神に就任してから一番最初の死者なのだ。私は就任したら一番最初の死者を生き返らせることにしていたんだ。まあ神の気まぐれというやつだな」

渡ははつと首をあげた。

「じ、じゃあ俺は元の世界に戻るのか!？」

すると彼女はこう返した。

「確かにお前はまた生を受け、再び生き返ることが出来る。」

しかし、世の中はそんなに甘いものではなかった。

「お前が生き返るのは元の世界ではない。また別の世界だ」

……は？

渡には意味が分からなかった。

別の世界ってどういうことだ？

「元の世界に戻してやりたいのは山々なんだが、元の世界に生き返るのは厳しく禁じられている。だから私はまだやり残した事がある者や未練がある死者を最初の一人に限って別の世界でやり直させることができるようにした」

思考が追いつかない。

別の世界だって？

「ま、まて神。別の世界っていうと、あれか？ パラレルワールド 並列世界とかいうやつか？」

「お前らの世界ではそう呼ぶのかもな。他の世界では異世界だのなんだのといっているがな。」

渡はパラレルワールドとかそういうのをあまり信じていない。が、

今の彼女が言うとなにか説得力がある。

「まあとりあえず、だ。お前を違う世界で人生をやり直しすることが出来る。まあその世界はお前の世界の常識は通用しないだろうし、分からない事も多いだろう。人間という種族がない世界もある」

渡は彼女の言葉を呆然と聞いていた。

パラレルワールド……？そんなものあるのか？

「まあお前がそれを望まないのならばこの話はなしにして、お前はそのまま輪廻の環に加わり、人格も何もかもかき消されてまた新しい存在に生まれ変わるだけだが」

彼女は試すような眼でこちらを見ている。

渡は決心した。

「……やってやろうじゃねえか」

彼女の眼の色が変わった。

「そうか、私の希望にこたえてくれる奴で嬉しいよ」

神はそういつて白い空間に座った。

「だが、ちょっと面倒くさいのがあってな」

渡は耳を立てた。

「お前がこれから行く世界には『科学』の代わりに『魔法』がある



んだ」

「魔法ってあれか？ファイとかブリザとかケルとか」

「そんなF みたいに便利な奴ではないが、大体そんなもんだ」

「そうなのか……。で、問題って？」

神はいった。

「魔法というのは魔力……。まあ分かりやすく言えばMP見たいなのが必要なんだ。その世界の魂ならば全ての種族、全ての生物が持っているものなんだが、お前はその世界の魂ではないから魔力がないんだ」

渡はショックだった。魔法は男の浪漫だ、と渡は思っていたのに。

「だから魔法分のハンデを何か一つ願いをかなえることで無くそうと思ったわけだ。」

「じゃあ俺にも魔法使わせてくれよ！」

「それは無理だ」

神はきっぱりと言いつつた。

「それはお前がその世界の住人ではないからだ。魔力というのは魂から生み出すもの。私が直接魂に、関与できればいいんだが、魂に関与す事も神であろうと厳しく禁じられている。だからお前は魔法をつかうことはできない。私も結構無理をしているんだぞ？」

渡はここで自分の夢が潰えた事を知った。……くそう。

「じゃあ、魔法以外ならなんでもいいのか？」

「お前の世界の理が通じるものならな」

……うーん、と渡は頭をひねる。

魔法以外といわれると中々出てこない。

空は飛べない、科学を持っても壊れたらそれまで……。

「自分の体を強化することしかないんじゃないか？」

「私もそう思う」

このロリータ神め……！

「じゃあお前の体を強化するという事でいいな？」

「ああ、そうしてくれ」

そういうと神の手がぼわん、と淡い青で光り始めた。

「はっ！」

神の掛け声とともにその光は俺のほうに飛んできて、そのまま体の中に入っていった。

なにかからだの中で動いている感覚がある。はっきりいつて気持ち悪い。

「なあ、なんか体の中を動いているんだが」

「ああ、もうすぐで慣れるはずだ」

神がそういった直後、体の中のものの感覚は消えていった。

その代わりに自分の中の何かが燃え滾っている気がする。

「これでお前は今から行く世界の住人よりも強い力を手に入れた。だが上には上がいる。気をつけるよ？」

神はまた立ち上がってなにやらぶつぶつ言い出した。

それから床にむけて力を放つ。

すると床に真っ黒い円形の紋章みたいなのが出てきた。

「これに乗つかれば別世界に行くが……心の準備はいいか？」

準備なんてとつくに出来ている。

「ああ、大丈夫だ」

「そうか……何か連絡があったらこちらからかける。じゃあ、いつてこい！」

「おう！」

渡は紋章に足を踏み入れた。

その瞬間渡は言いようもない浮遊感と眩暈に襲われた。

「そうそう、言い忘れていたがお前の称号は『神の使い』だ。忘れるなよ?」

なんて言っただか全く聞こえなかったんだが……。

~~~~~

気が付くと何か祭壇みたいな場所に立っていた。

周りには大勢の人々。

いや、人に猫耳犬耳尻尾翼等がついた、人型の生物が大勢いた。

髪の色や眼の色、身長や老若男女関係なく様々な変な人たちが祭壇の周りに集まっている。

「……え?」

周りの人たちはざわざわ、と騒がしい。

渡も思考が停止していると、後ろから声かけられた。

「おいお前。お前は…その、『ヒト』か？」

渡が振り返るとそこにはいかにも姫様という人が立っていた。

白を中心としたドレスを身にまとい、金色の髪を背中まで伸ばしている。王族みたいな雰囲気もぴったりだ。

「ん、ああ。確かに俺は人間だが……」

渡は突然の事だったのでついそのまま答えてしまう。

「そうか。……おいお前ら！ こいつを連れて行け！」

姫らしき人がそばに控えていた兵士に声をかけると、兵士は渡を羽交い絞めにする。

「おい！ なんだお前ら！ 俺を放せ！」

渡は兵士に捕まり、そのまま連れ去られていった。

……いきなり嫌な予感がする。

く神の気まぐれく（後書き）

感想お待ちしております

ゝ覚醒ゝ（前書き）

なんだか話が進むたびに一話一話が長くなっているような・・・

く覚醒く

「念のためにもう一度聞く。……お前は『ヒト』だな？」

目の前の姫様はこういった。

今渡が置かれている状況はこうである。

二人の兵士によって連れ去られた渡は、いかにも『貴族の家』という国会議事堂よりも大きな屋敷に連れて行かれた。

その小さな部屋に押し込められ、10分ほど待たされた後に先ほどの姫が2人の護衛を引き連れてこの部屋に入ってきたのだ。

姫は白を基調としたふりふりのドレスを身にまとっている。

髪の毛の長さは大体セミロングといったところだろうか。

いかにも姫様という感じだ。

そして姫は開口一番こういった。

「念のためにもう一度聞く。……お前は『ヒト』だな？」

「ああ、まあ人っちゃあ人だな」

渡がそう返すと姫は頭を抱えて悩んでしまった。

「私が……この私がヒトを召喚か……」

姫が頭を抱えて悩んでいるが、渡にはそれよりも聞く事がある。



「おいあんだ、ここはどこだ？ お前はなんていうんだ？」

渡が聞くと後ろの護衛の一人が反応した。

「貴様！ ヒトごときが王族である姫様になんという言葉遣い！

……姫！ やはりこいつは何かの手違いです！ 即刻処刑すべきです！」

口を開いたのは猫の耳と尻尾をつけた女性の騎士。

騎士らしく鎧を着ているが兜を外しており、一本に結った長い銀色の髪を垂らしている。

腰の剣に手を当てて、臨戦態勢になっている。

「まあまでミーシャ。もう少し聞いてみたい事がある。」

今にも渡に斬りかかろうとするミーシャと呼ばれた騎士。

するとミーシャはひとまず剣から手を放した。

だがいまだに渡の事をにらみつけたままである。

姫はミーシャから視線を外すと渡に正面から向かった。

「さて、ヒトよ。お前は何と言う？」

「俺は柳瀬渡という。お前は？」

一言一言渡が言葉を発するたびに後ろのミーシャがぴくぴくと青筋を立てているが、渡は気が付かない。

「お前、私を知らないのか？……その名前といい、その格好といい、黒髪黒眼も珍しいし、何より王族であるこの私を知らないのか……」

姫はうーんと唸ったまま黙ってしまっ。  
しばらく気まずい空気が流れる。  
すると姫がその空気を破るように言った。

「じゃあまず自己紹介だな。私はシルビア・ヴィル・コータンス。  
この王国の第四王女だ」

渡はそれを聞いた途端、ごふっ！ とふきだしてしまった。

なぬ！ 王女とな！？

じゃあそれなりに敬意を払わないといけないのかな……？

といつてもいきなり態度を変えてはちょっと恥ずかしいしこのま  
までいいや、と渡はスルーした。

「王女様……。へえ」

「っ！ 貴様あ！ どれだけ姫を侮辱すればすむのだ！？ へえ、  
はないだろへえ、は！！」

いきなりミーシャに怒られた。思ったことを言っただけなのに……

「ミーシャ。お前少し出てろ」

と、そこで姫の冷たい宣告が出た。

「んなつ！ 何故ですか！？ 私はこいつが姫に対してあまりにも  
無礼だから……」

「お前がいると話が進まん。デニク。こいつを連れ出してくれ」

シルビアがそういうとデニクと呼ばれた青髪の頭に角が生えた騎士はミーシャを羽交い絞めにしてこの部屋から出て行ってしまった。

「姫！ そんな野蛮人と話してはなりません！！ そのような者は……」

ミーシャの言葉は最後まで届かず、この部屋からいなくなった。部屋には渡とシルビアだけが取り残され、静寂が二人を包んだ。

「……ふう。悪いな、根はいい奴なんだ。許してやってくれ」

「いや、気にしてませんよ」

「そうしてくれるとありがたい」

そういつてシルビアは微笑んだ。  
ちよつと可愛かった。

年は同じくらいだろうがまだ幼さが残る笑顔で、こう、グツとくるものが……

「さて、本題に入るが……」

シルビアの言葉で現実に戻ってくる渡。

顔がにやけてないかどうか、顔をグニグニする。

「なんですよ？」

「お前は何者だ？」

その質問に渡はぽかんとする。

「いや、柳瀬渡だってさっき……」

「名前の事じゃないヤナセ」

「あ、名前が渡で苗字……ファミリーネームが柳瀬」

「む、そうか。ならばワタル」

シルビアはそこで言葉を切った。

「はい？」

「何故お前は召喚の儀の場で召喚されたのだ？」

渡は悩んだ。

召喚の儀とはさっきの祭壇での事だろうが、何故かなんて自分にも分からない。

「それが……俺にもわからないんだ。気が付いたらあそこにいた」

「そうか……」

そういつてシルビアは黙り込んでしまう。

そういえば……

「それだと何かやばい事でもあるのか？」

するとシルビアは攻め立てるように言った。

「やばいもなにも、王族である私が隷族であるヒトを召喚してしまったら国の信用に関わろうが！」

……隷族？

隷族というのはこの世界での奴隷の民のことなのだろうか？

「ヒトって奴隷なのか？」

「おま……そんなのも知らないのか？　もしかしたらお前は秘境の民なのか？　それならば色々と納得がいくが……」

シルビアはそういつてから黙り込んでしまった。

ヒトが奴隷？

信じられん……

「何も知らん奇妙な奴隷か……。まあそこらへんはどつでもいいだろう」

シルビアはそう呟くと、

「お前、これから私の奴隷になれ。わかったな？」

……は？

「ちょっと待て！なんで俺が奴隷なんか……」

「うるさい。ヒトは奴隷と先ほど言っただろう？ お前はかなり珍しいがお前を持っていれば私の宣伝にもなるしな」

「ざけんな！ 俺はお前なんかの奴隷になるつもりはない！」

そう返すとシルビアは人が変わった様に言った。

「王族である私がうるさいといったのだ！ 黙らんか！ ……おいデニク！」

姫が叫ぶとさっき出て行ったデニクが部屋に入ってきた。  
もしかしたら気を使って部屋の外で待っていてくれたのかもしれない。

「こいつを牢に連れて行く！ こいつはこれから私の奴隷だ！」

「わかりました」

デニクは指をパチン！ と鳴らす。

すると部屋の入り口から兵士がぞろぞろと出てきた。

「うわっなんだよ。放せ！ 放せEEEEEEEE！！！！！！」

~~~~~

そして今見事につかまり手錠をかけられて護送中である。  
周りには数人の兵士とシルビアだけである。

「お前はこれから日の出とともに起床して私のために働け。いいな？」

前を歩いていたシルビアは振り返ってそういった。

「……あい」

渡はそう言うしかなかった。

これ以上反抗しては首が胴とお別れしなければならぬかもしれない。  
ない。

「今までの無礼を許して私直属の奴隷にしてやるのだ。嬉しく思え」

言ってからまた前を見て歩き出すシルビア。

今までの口調から一変して我が儘な王女に変わった。

（俺、これからどうなるんだろうなあ）

これからのことを不安に思いながら長い廊下の窓を見る。  
外では何かの訓練をしているか、手から火の玉を出したりしているのがある。

（あれが魔法って奴か・・・）

その様子をぼんやりと見ていた渡だったが、窓の外で一際大きい火の玉を見付けた。

その玉は術者の手を離れると的に一直線に向かっていった。

はずだった。

その火の玉は的に当たるかと思いきや、いきなり方向を変えてこちらに向かってきた。

（うわ！こっち来た！）

しかもその方向の先には……

（シルビア！）

シルビアに向かって一直線に突き進む火の玉。

当のシルビアは上機嫌に鼻歌を刻みながらスキップをしている。

（くそ！この手錠が……）

そのとき渡の中でもぞ、と何かが動いた気がした。  
次の瞬間、



「……………!!!」

渡は手錠を壊してシルビアに飛び掛った。

渡はシルビアを抱いたまま十数メートルを駆け抜ける。

シルビアは何が起こったかわからないようで眼をぱくりさせていた。

そして後方で爆発が起こる。

壁はほぼ破壊され、渡を護送していた兵士たちも数メートル吹き飛ばされた。

熱風という衝撃波が廊下じゅうを襲い、壁にかけてあった絵画や、いくらするのか分からないような陶器が次々と破壊されていく。

シルビアは訳が分からないようで、

「……………？　おいワタル。お、おま……………て、てじょ……………？」

何を言っているのか分からなかった。

「おいシルビア、きちんと周りを見て歩け」

シルビアはそういわれて周りを見た。  
すると、

「なんだ！　敵襲か！？　おろせワタル！」

シルビアはそう叫んでじたばた暴れだした。

「ちがう。外で訓練していた奴らのが壁に直撃しただけだ」

渡が言うと、壁にあいていた穴から人が入ってきた。

「っ！ 誰か喰らった奴は……っひ、姫え！？」

最後の方は声が裏返ってしまいち聞き取れなかったが、だいぶ混乱しているようだ。

「もももも、もももうしわわわけございませにゅ……！！！」

……めっちゃ噛んだ。

だが当の本人はそんな事はどうでもいいようで、必死に弁明している。

「わわっわ私のふちえぎわによりこのっようなことをしてしまままま……」

「うるさい」

「っひ……！」

そいつは顔を真っ青にして土下座した。

「申し訳ございません……！！！」

脳が揺れるほど頭をがんと床にたたきつけている。  
しかしシルビアはそれを無視して、

「……ワタルよ。もしかしたらお前が私を助けてくれたのか？」

「ああそうだが？」

するとシルビアは身を引いて驚いた。

「んなつ、お前手錠はどうした！？ 確かに手錠をしてあっただろう！」

「ぶっ壊した」

「はあ！？」

手錠は鉄製で普通の人には壊せないだろう。  
しかし渡は普通ではない。

「お前に直撃コースだったからな。ぶっ壊して助けたんだよ」

そういつて渡は壊れた手錠をシルビアに見せ付けた。  
シルビアは何かを言おうとして、だが口をパクパクさせるだけで何もいえなかった。

喋る事を諦めたのか、シルビアは黙って考え込んでしまった。  
その様子を渡は静かに見ていたのだが、シルビアの顔が難解な問題に直面した顔から喜々とした満面の笑みに変わっていく。  
その様子を見て渡はゾクリ、と背筋が震えた。

「お前は手錠を壊して私を助けたのだな？」

「……ああ」

渡がそう答えるとシルビアは心の底から楽しそうに笑っていった。

「よし！お前は奴隷はなし！かわりに私の手駒として働け！」

……手駒？

「確か四番隊の副隊長席が空いていたな……よし、ワタルを四番隊の副隊長に任命する！」

四番隊の副隊長……？

「なんだ？ 副隊長って」

すると廊下の角から騒ぎを聞きつけたのか、ミーシャがすっ飛んできた。

「姫ええええ！ ご無事でございますかあああー！」

この世のものとは思えない形相でシルビアの下に直行し、抱き上げた。

「姫！ ご無事でございますか！ だからあんな野蛮人は打ち首にしたほうが良いと……」

ちよいまで、今回俺は助けたんだぞ？

「みみみミーシャおお落ち着け。首が、首が……」

「っは！ 申し訳ございません！」

と、ミーシャは姫をおろした。

「姫！ 何があつたのでございますか！？」

シルビアはケホケホとむせながら言った。

「……コホッ、いや、いきなり壁が爆発してな、それをワタルが助けてくれた、というわけだ」

するとミーシャが信じられないものをめにしたような感じで渡を見た。

「こっこいつが……？ 姫を……？ ……ありえん」

「ありえるわアホ！ なんで俺が見殺しにせにやあなんのだ！」

「アホとはなんだ！ アホとは！ ……それならば姫、こいつに手錠はしていなかったのですか？」

シルビアはミーシャに聞かれると自信満々に答えた。

「それがな、鉄の手錠をしていたのにも拘らずそれを破壊して私を助けたのだ！」

「んなつ、こんな奴に鉄の手錠を壊せるわけがないでしょう！ それが出来るのは獣人が半竜人ぐらいです！ 嘘も大概にしないと……」

「本当だ！ だったらこれを見てみる！」

シルビアはそういつて渡の持っていた手錠をひったくった。

「これがワタルにかけていた手錠だ。見事に壊れているだろう？」

それをみたミーシャはむむ、と唸った。

「しかも私と数メートル離れていたにも拘らずそれを一瞬で縮めて私を助けたのだ！ そんな人材を私が見逃すわけがないだろう？」

そこで言いたい事がわかったのかミーシャは恐る恐る聞いた。

「あの、姫様？それはまさか……」

「ああ、ワタルを四番隊の副隊長にする。ちょうど席も空いてたしな」

それを聞いたミーシャはさらに取り乱して、

「ひっヒトを奴隷以外になど、しかも副隊長！？ たしかに四番隊の副隊長席は空いていますが、こんなやつを副隊長などに任命しようものなら周りが黙っていませんよ！ それにエリスが可哀想です！ こんな野蛮人なんて！」

渡はミーシャの酷い言い様にショックを受けた。  
いくらなんでもそこまで野蛮じゃないよ？

「それにこんな奴が『称号』を持っているわけ無いじゃないですか！」

……称号？

「称号は私がつけてやる！　そしてワタルはエリスを襲えるほど度胸があるとは思えん！　周りは私が無理やり抑える！」

二人の言い合いに渡は少し傷つきながらも必死に思い出そうとしていた。

（称号……称号、なんか神が言っていた気もする……）

二人がギャーギャーと騒いでいる中、渡が呟いた。

「……称号」

渡の呟きを聞いて二人は争いをやめて渡を見た。

「なんだワタル。お前称号持ってたのか？」

「いや、こんな奴が持っている訳ないです！　ここでなんとか奴隷を脱出したいから良い感じの称号を勝手に考えているだけです！」

「馬鹿を言つなミーシャ！　そんなわけがないだろう！」

再び言い争いに入ろうとする二人。

その前に渡は二人に呼びかけた。

「あつた……気がする……」

その言葉を聞いてシルビアの顔がぱあっと晴れた。

「おお！ 持っていたのか！ で、なんだ？ 何と言う称号なのだ？」

「やっぱり即興で考えただけです！ 信じませんからね！」

渡は必死に神の言葉を思い出そうとする。

（『そうそう、言い忘れていたがお前の称号は……』）

「神の使い……？」

それを聞いて二人はぼかんとし、二人の頭上に？マークが浮かぶのが見えるようだ。

渡もよく覚えていないためまた考え込んでしまう。

一番早く覚醒したのはミーシャだった。

「っ貴様！ ぱっと思いついた称号が『神の使い』だと！ 貴様なんかが神を語るな……！」

そういつて腰の剣を抜き、渡の首に切っ先を向けた。

本気で切り落とすつもりだ、と目で語っているミーシャに気迫で押されて一歩後ずさる。

そんなミーシャをシルビアがなだめた。

「ま、まあミーシャ。ルミニに任せれば一発だろう？ だから、な？ とりあえず剣をしまえ」

シルビアに言われて渋々剣を収めるミーシャ。



だがまだ認めていないようで、

「ならば早くルミニに鑑定させましょう！……その！」

いきなり振られて肩を振るわせる、まだ土下座をしていた兵士。

「なんでしょう！？」

「至急ルミニを呼んで来い！」

「わかりましたあ！！」

そういつて走り去ろうとする兵士。

それをシルビアが呼び止めた。

「いや鑑定は私の私室で行う。ここでは少し人目が多すぎる」

三人は周りを見回した。

確かに騒ぎを聞きつけた兵士や使用人がたくさんいる。

土下座兵士はシルビアの言葉を聞くと、限界を超えた速さで走っていった。

「……さて。一応聞くがワタル。お前の言葉に嘘は無いな？」

「……たぶん。そんな感じのことを言われた気がする」

すると笑顔になるシルビア。

「よし！ 私はお前を信じるぞ。」

そういつて歩いていくシルビア。

「……っおい。どこいくんだ？」

「どこって私の私室だ。さっき言った言葉、覚えていないのか？」

そういえばそんな事も言ってたっけ、と渡はシルビアについていこうとする。

すると後ろからものすごい殺気を感じた気がした。

振り返ったら負け。

そう思った。

「おい貴様。謝るなら今だぞ？ 今ならまだ許してただの奴隷にしてやる。鑑定結果が出てから謝っても私は許さん……必ずお前を打ち首にしてやるからな……」

底無しの殺気が渡を襲う。

体が一瞬硬直した。

ゝ覚醒ゝ（後書き）

感想お待ちしております。なんでもいいのでどんどんください！

く長い一日く（前書き）

書いている間に今どこなのか分からなくなっ  
たような気がします

「長い一日」

シルビアの私室に着くとそこには年老いた老人がいた。

「来ましたな。その後ろのが先ほど姫様が召還なされたヒトですな？」

頭は白髪で、顔中皺くちやで、緑のローブを纏ったいかにもおじいちゃんな方だ。

「ああそうだ。で、ルミニ、こいつを副隊長にしたいからこいつの称号を調べてくれ」

シルビアがそういうとルミニはほっほっと笑った。

「まさかヒトを騎士団の中に入れようとする方がいるとは……いやはや命知らずですな。まあ私はそんな姫様が好きですぞ」

ルミニはそういつてローブの中からなにやら器械を取り出した。イメージだと血圧を測るときに使う血圧計みたいな機器だ。

「ルミニ、お前が気になるのも分かるがそれは私の部屋で、だ」

シルビアがそういうとルミニはまたほっほっと笑って、

「いやいや、申し訳ございませぬ。姫がそんなに騎士にしたいのであればそれ相応の何かを持っているのでしょうか？ 気になって仕方ありませんな」

ルミニは血圧計みたいなのをロープの裾にしまっ。

それを見たシルビアは傍のドアを開けた。

中はいかにも姫様といった感じの部屋だった。

部屋の中はピンクを中心とした部屋で、目の前に見えるベッドには天蓋なんかがついている。

シルビアは部屋の真ん中にあつた小さなテーブルの小さな椅子にちょこんと座った。

「さて、早くしてくれ」

シルビアは先ほどまで抑えていたわくわくを一気に開放して満面の笑みでそういった。

「わかっております。……では、えーと」

「柳瀬渡です。ワタルのぼうが名前です」

それを聞いたルミニは、

「面白い名前ですな。ファーストネームが名前でない、と」

「そうだろう？ それに面白い生地を着ているし、胸の何かの勲章だろうしな」

たぶんシルビアの言っているのはジャージのことだろう。

渡は赤く、脇に黒い線が入ったジャージを着ている。

勲章とは胸の所にある母校の校章の事だろう。

「いや、これは勲章じゃなくて……」

「そんな謙遜はいらん。それよりも早く」

シルビアは渡とルミニを急かす。

「わかりました。ではこちらへ……」

ルミニはそういつてテーブルの反対側に座る。

渡もルミニに向かい合つて座った。

ミーシャは渡の後ろで腰の剣に手を当てて渡を見下ろしている。渡の背中にびびしと視線を向けてくるが渡はあえて無視した。

「さて始めますかな」

そういつてルミニは血圧計をテーブルにのせた。

「これは魔道器。これで生物の魔力、生命力等の潜在能力や、称号の判別も行つことが出来る優れものですぞ」

ルミニは自慢げに魔道器とやらをばんぽんたたいた。

「ではこの穴に腕を入れなされ」

渡は魔道器の穴に腕を入れた。まんま血圧計だ。

渡の腕が入ると魔道器の穴がひとりでに締まる。

だが血圧計とは違ってそんなに締まる事はなかった。

渡の二の腕にぴったりとくつくと、ふいふいんと小さな起動音が聞こえる。

しばらくその状態が続く。

ルミニもシルビアもミーシャもその魔道器にかじりつくように見入っていたが、その起動音が消えると全員ふはあゝ、気を抜いた。

「で、ルミニ！ 結果はどうだ！？」

ルミニは魔道器についた水晶をじつと見つめていたが、その結果に眉をひそめた。

「これは……どういうことでしょう。この者に魔力が存在しませぬ。生命力はとても高いようですが……故障ですかな」

その言葉を聞いて渡が反応する。

確か神の説明のときにそんな事を言っていたはずだ。

「いや、俺って体は丈夫なんですけど、その、魔法というものが全く使えないらしくて……」

その言葉にその場にいた全員が疑問を浮かべた。

「魔法が使えないって……そんな奴聞いた事がないぞ」

ミーシャはそうつぶやいたがシルビアにはそれよりも優先する事があるらしい。

「いや、そんなことはどうでもいい！ それよりも称号だ！ 持っているのか！」

シルビアはその後に、まあもっていなくとも私がつけるがな、とシルビア自身も半信半疑のようだ。

「まあまあちなされ、姫。そんなに急がなくとも称号は逃げませぬぞ」



ルミニはやれやれといった様子で水晶に視線を戻す。ルミニも信じていないようだ。

ルミニはのんびりとした様子で水晶を眺めていたが、

「つぬ……！」

椅子から滑り落ちた。

いきなりの事に驚いて、シルビアは目を丸くしている。

「どうどうしたルミニー！」

ルミニは苦しそうにもがいている。

「こつ腰が……いや、それよりも……ぐふっ！」

ルミニはやっとの事で椅子に座りなおすと深呼吸した。

「ルミニどうしたのだ！」

ルミニは一つ咳をしてシルビアを手で制した。

「ごほっ……姫様、あなたはとんでもない者を召喚なされましたな……」

ルミニの言葉にシルビアは静かになる。

「この者……いえ、このお方は『神の使い』。です……」

ルミニはシルビアをまっすぐ見つめていった。

「……は？」

シルビアは思考がついていけないようだ。

後ろで控えていたミーシャも信じられないようでルミニに詰め寄った。

「こっこんな輩が神の使い！？ そんなわけがないでしょう！ 何かの間違いです！ その魔道器は壊れています！」

するとルミニはミーシャを睨み付けた。

「言葉を控えなされミーシャ殿！ 『神の使い』様に向かって何たる無礼！ 確かにヒトは隷族ですがヒトは本来『原初の種』。今ある種族はエルフやヴァンパイア等例外は除き、ほとんどヒトから生まれ、本当ならば我らはヒトを敬わなければならない存在。『神の使い』様がヒトの形をしていてもなんら問題も無いはずですが、しかもこの方の格好。黒髪に黒目。さらに格好も我らとは違います。『原書の種』であるけれど普通のヒトとは違う……。この方が神の使いである証明にこれ以上のものがありましようか！？」

ルミニのあまりの剣幕にミーシャは思わず身を引く。

ルミニは息を切らせて言い終わると、シルビアの肩を掴んだ。

「姫！ このお方を四番隊の副隊長なんぞに留めてはなりません！ 將軍……いや王の傍に置かれるべきですぞ！」

ルミニの言っている事はよく分からなかったが、渡にはとにかく

あまりよくない方向に進んでいる事はわかった。

あまり位を上げられては面倒くさいので渡は辞退する事にする。

「いっいや、そんな王様の傍だなんて、面倒……いや、よく思われない方も多いでしょうし、そんなに高くされなくても！」

渡のその言葉を聞くとルミニはふむ、と考え込んでしまった。

「確かにザファールス家の連中がしゃばってきそうですが……あなた様が副隊長に落ち着くなど……」

ルミニはまだ不満があるらしい。

ルミニがうん、うん、と悩んでいる所でシルビアがようやく口を開いた。

「ワタルは、どうしたい？」

「え？」

突然の事だったので反応できなかった。

「ワタルはどうしたい？偉くなりたいか？」

シルビアの顔にはどこか寂しげな色が見えている。

渡は少しだけ悩んで、

「俺は別に偉くなりたいだなんて思っていないよ」

実際の所は面倒くさそうだったからなのだが。

その答えを聞くとシルビアはぱあっと顔を輝かせて、

「おお、やはりそうか！」

席を立つて喜んでいる。

そんなに喜ぶ事なのかな、と渡が心の中で苦笑していたその時だ。

「納得がいきません！！」

ミーシャが渡の耳元で叫んだ。

渡の耳がきんきんとする。

ミーシャはわなわなと震え、拳を握る。俯いているせいで顔は良く見えない。

それに反論したのはルミニ。

「ミーシャ殿まだ言いますか！　このお方は神の使い！　何故認めようとせぬのですか！」

その問いにはミーシャは答えず、ただ震えているだけだった。がしばらくして口を開いた。

「ならば……」

「ん？」

「ならば決闘を！　神の使いならば一番隊隊長であるこの私を倒す

など造作もないでしょう!!」

渡は頭を抱える。

面倒くさい事をしてくれたな、と。

しかし他の二人は案外乗り気のようで、

「それでワタル様が勝てばよろしいのですね？　ならば簡単でしょう」

「ワタル！　お前は勝てるよな!？」

お前ら少しは身内を応援しろよ。

実際は渡よりもミーシャの方が身内なのだろうが。

そんな渡の心の声も届かず話はどんどん進んでいく。

(俺がこんな人に勝てるわけ無いじゃん……魔法も使えないしさ)

渡はすでに諦めモードである。

「そうとなれば善は急げ。ルミニ！　ただちに他のものたちを闘技場に集めよ!」

「かしこまりました。……ほっほっほ、長生きするもんじやのう。  
楽しみじゃわい……」

おい、じじい最後の聞こえたぞ……。

渡は部屋から出て行こうとするルミニを睨み付ける。

だが当のルミニはその視線に気が付かないまま部屋を出て行ってしまった。

取り残されたのは眼を輝かせるシルビアと殺る気まんまんのミーシャ、意気消沈の渡である。

ミーシャは身を翻すと、

「コロシアムで会おう。……まさか逃げるなんてしないよな？」

挑発を捨て台詞代わりに残し、部屋から出て行った。

「さてワタル、これからミーシャと決闘だ。時間は大体3時間後ぐらいだろう。それまでにやることはたくさんある」

やる気が失せている渡をよそに一人で勝手に話を進めるシルビア。

「まずは武器選びだな。流石に丸腰で挑んでは死んでしまう。そうと決まれば、ほら行くぞ！」

眼が輝きに満ちているシルビアは、目が死にかけている渡の手を引っ張って部屋を出て行く。

渡は思う。

丸腰だろうがそうでなかろうがどっち道死ぬのではないかと。

~~~~~

ここは武器庫、らしい。

目の前には見張りの兵士が二人。

シルビアが近づくと番の兵士たちはこちらに気が付いたようだ、  
持っていた槍を縦にかまえる。

「姫様、話は聞いております。後ろの方が神の使いであるヤナセワ  
タル様ですね？」

どんだけ話が広がるのが早いんだ、とため息をつく。  
ため息が口癖になってしまいしそうだ。

「ああ、聞いているなら話が早い。あけてくれ」

シルビアがいうと兵士は武器庫の大きな扉を開ける。  
ギィイ、と重そうな音を立てて武器庫の扉を開けた。

「では行くぞワタル」

シルビアはつかつかと中に入っっていつてしまう。  
渡もシルビアを追って中に入っっていった。

武器庫の中は暗く、だが風通しはよくじめじめとはしていない。

「よし、この中から好きなのを選ぶ」

そういわれて渡は武器庫の中を見渡してみる。  
中には剣、盾、槍、弓、メイスや鎧などがある。  
が、渡にはどれを選べば良いのか分からなかった。

とりあえず一つ一つ手にとって見てみる。

どれもこれもきちんと手入れされていて、刃を覗き込むと自分の顔が見えるくらいだ。

どれにしようかとなやんでいるとシルビアが声をかけてきた。

「おいワタル！ これなんかどうだ？うちの国の新兵器だぞ！ 名前はまだ決まっておらんがな」

そういわれて振り返ってみたのは、

「薙刀ってここにもあったのか」

そう、薙刀である。

槍のように長い柄の上に片刃の剣が取り付けられている。

実は渡の兄が薙刀部に入っていて、小さい頃によく練習や大会を見に行っていたのだ。

だから少しだが型は分かる。

渡は無言でシルビアの持っていた薙刀を受け取るとシルビアから少し距離を取った。

意外に重量を感じることは無く、ひょいと持ち上げる。



そしてその場で見よう見まねの型を試してみた。  
ブンツブンツと重量感のある音が聞こえる。

本当はもつと重いのだろうが神の力によって強化された渡にはそんなに苦にはならない。

素振りをしている渡を見たシルビアは驚きの声を上げる。

「おい、お前その武器知っているのか？ それは我が国の新兵器なんだぞ？」

「俺の国にもこんなやつがあつてな、兄が使っていたんだ。今のは兄のを真似しただけ」

「ほう……我が国の新兵器が神の国には既にあつたのか……」

神の使い「神の国とされているが渡は無視した。」

「よしワタル、お前の武器はそれだ！ がんばれよ」

渡は勝手に決め付けられて反抗しようとしたが他の武器よりもこれのほうはまだ知っているから、とやっぱり薙刀にすることにした。

「それにしても……それは神の国ではナギナタというのだな……ならば我が国でもその名前にしよう！」

「良いのか勝手に決めて？」

「構わん！ 名前がいつまでもないよりはあつたほうがいいだろう？ それに神の国のと同じ名前だ。兵士の士気も上がるだろうしな」

そうか、と渡は適当に流して武器庫を出て行く。  
やる事が無いのでとりあえず試合開始まで練習する事にした。

「おいワタル！　ここで振るな、危ないだろうが！」

~~~~~

そしてここはコロシウム。

目の前には完全装備のミーシャ。

周りには席がちらちら空くほどの観客、もとい暇な兵士。  
そして一際高い席にはシルビアが座っている。

「よく逃げ出さずに来たものだ……」

「いや、この空気で逃げ出せたらそれはそれで勇者だよ……」

「逃げ出すのが勇者だと！？お前それでも騎士を目指す存在か！！」

いや、そういう意味ではなくてですね。

渡はなんとか言おうとしたが無意味なのを知っているのやっぱ  
りやめる事にした。

「ルミニ！ さつさと始めろ！」

審判役のルミニをミーシャは急かす。  
ルミニもさつさと始めたいようで、

「わかりました。双方よろしいか！？」

ルミニは渡とミーシャに眼を向ける。  
ミーシャが頷いて応えようとルミニも頷き返した。

「では、始めいっ！」

その瞬間観客席から大きな歓声が起きる。

「我が名は『戦場の詠い手』ミーシャ・ランツェルフ！ゆくぞー！」

ミーシャが名乗りを上げると爆発的な勢いで突っ込んできた。

渡は、

（なんか名乗るのって結構恥ずかしくないのか？）

こんな事を考えていた。

命がかかっているのにのんきなものだ、と渡は自分自身で突っ込んだ。

「余所見をするな！」

そうこうしているうちにミーシャがあと少しのところまで迫っていた。

ミーシャは後一步の所を無理矢理蹴って距離をつめる。  
渡はバックステップでミーシャの横薙ぎをかわした。

そこからミーシャはどんどんと連続で斬っていく。  
だが渡は間一髪の所で全てかわしていた。  
それを遠くで見ていたシルビアは、

（ミーシャが優勢だな……だがミーシャは冷静さを失っている。そこにつまく付け込めば……）

客観的な判断を下した。

興奮すると融通が利かなくなるのにこんな所だけ優秀である。  
そんなシルビアから劣勢に思われていた渡も結構疲れてきた。

（こんんなにかわ、すのはつつかれるなあもう！）

時にはバックステップ、時には薙刀で弾きながらミーシャの斬撃をかわしていく。

しかしそれにも限界はあり、  
ふっとミーシャの放った鋭い突きが渡の頬を掠めた。

「どうした？動きが鈍っているぞ？」

ミーシャがさらに挑発した。

「こんんのやろうー！」

渡は無理矢理ミーシャを押し返す。  
体が火照っているからか、興奮しているからなのか、体の中がぞわぞわする。

「これで終わりだ！」

ミーシャは押し返した分の距離を一気につめて向かってきた。剣は既に上段に構えており、体重の全てをかけていることが分かる。

（こんなところで……死にたくねえ！！）

そのとき渡のからだの中が大きく動いた。もぞり、と何かがうごめき、力が全身にいきわたり、時間が遅く感じる。

渡は無我夢中で動いた。

前へと。

薙刀の峰の部分でミーシャを切り払い、そのまま十数メートル駆け抜ける。

後ろでミーシャが倒れる音がした。

誰にも何が起こったかわからない。

ただ、渡が瞬間移動したようにしか見えなかっただろう。

だがしかし、これで渡が『神の使い』である事は証明された。

とたんに響く歓声。

一番状況を理解していなかったのは渡であろつ。

渡はただ呆然としていた。

しばらくぼーっとしていると、後ろでもぞり、と音がした。

ミーシャが起きたのか、と後ろを振り返って臨戦態勢に入っただが  
ミーシャの殺気は消えていた。

「いや、強いな」

ミーシャの起きてからの第一声はそれだった。

「ありがとうございます」

ミーシャは頭を下げる。

つられて渡るも頭を下げた。

その様子にミーシャは少し驚いたようだったが、しかし何もいわずにコロシウムから出て行った。

こうして二人の決闘は幕を閉じた。

「よくやった渡！」

ここはコロシアムの控え室。

部屋には渡とシルビアの他にはミーシャだけである。

「最後の一撃は全く見えませんでした」

と、自分を全否定していたミーシャがほめてくれると何だかむずがゆい。

渡が頭をかいて照れているとシルビアがいった。

「これでお前ははれて四番隊の副隊長だ！　よかったな！」

……おおう、すっかり忘れてた。

まあ王様の傍よりは全然楽そうだし良いかな……？

「まあお前も四番隊の副隊長になったわけだから四番隊の奴らに挨拶でもしてきたらどうだ？」

「それもそうだな……その、隊長ってどんな人？」

シルビアも失念していたようで、思い出したように言った。

「お前のとこの隊長はエリス。まあ詳しくは本人に聞け。四番隊の兵舎までは私が送ってやるから」

シルビアはさっさと控え室を出ようとする。

渡も追いかけようとしたがミーシャに後ろから声をかけられた。

「その、ワタル……さん？」

「いや、気持ち悪いから渡でいいよ」

「ワタル、その……すまなかった」

突然の行動に動揺する渡。

「え！？ なんのことですか？」

渡がとぼけるとミーシャは渡に詰め寄った。

「とぼけるな！今までしてきた数々の無礼、お前が本当に神の使いならばこの場で私を切ってくれても構わないぞ？」

騎士道精神凄いなあ、と感心する渡。

「いや、別に気にしてないよ。ミーシャさんもいきなり来た俺を信じてくれないのは当たり前前の事だと思うしさ」

その言葉を聞くとミーシャは安心したようにいった。

「…………お前は心が広いな。ありがとう」

ミーシャはもう一度頭を下げる。

「そんな、いいですよ。…………ではこれで」

そこにいるといつまでも頭を下げていそうなので立ち去る事にした。

ミーシャがいい奴というのは本当なのかも、と思う渡だった。

~~~~~



「さあ、ここが四番隊の兵舎だ」

渡の目の前にはレンガを積み上げて出来た建物があった。それは大体一戸建ての家を四つぐらいつなげたぐらいの大きさだった。

「四番隊は人数が少ない部隊だからな。兵舎も訓練場も小さいんだ」

渡にはこれで小さいのか？ と思えたが屋敷を見た時点で大きさについては問わないことにする。

兵舎の隣に運動場らしきものが併設されていて十数人の兵士の姿が見えた。

恐らく訓練場とはあれのことだろう。

「さて、行くぞ」

シルビアはそのままつかつかと歩いていってしまっ

渡もシルビアを追いかけようとしたが何故か立ち止まったシルビアにぶつかりそうになり、つんのめって転んでしまった。

「っ、あぶねーだろ！」

「ああ、すまん」

軽く詫びを入れるシルビアだったが反省している様子はない。その様子に軽くイラッときたがここは抑えておく。

「どうしたんだ？」

渡が立ち上がりながら聞くとシルビアは訓練場の方を指差した。渡が指の先を見てみると、誰かがこちらに向かって走ってきている。

黙ってみているとその人物は大体200メートルの距離を10秒足らずで縮めて渡たちの目の前に来てしまった。

その人物は膝に手について肩で息を切らせていたがしばらくすると立ち直って言った。

「どうでしたか!？」

渡には意味不明の言葉だったがその問いにはシルビアが答える。

「ん、一回位は唱えられるな・・・もう少し速くなった方が良さぞ」

シルビアの言葉を聞くとその人物は肩を落とした。

渡は会話に取り残されていたがシルビアが渡を会話に混ぜた。

「紹介する。こいつが新しくお前の隊の副隊長になったヤナセワタルだ」

「柳瀬渡です。渡のほつが名前」

渡が頭を下げると、相手も律儀に頭を下げてきた。

「私は四番隊のエリス・フィンカートといいます！ 種族は竜人です。・・・ワタルさんの噂は聞いていますよ！ 一番隊隊長のミィシャさんを一撃でノックアウトとか！ さすが『神の使い』ですね！！」

エリスの髪は銀色の髪を肩で揃えていて、前髪は目にかかるくらい。額には大きめのゴーグルを掛けている。

「私は試合は見ていなかったんですが、私の部下が見ていたらしくて、それはもう目に見えないほどの速さだったといっていましたよ！」

「いや、そのときは必死だったのにおれ自身は覚えてないんですよ」

渡は余りにも褒められたので（女子というのもあるが）照れてしまっ  
まう。

シルビアはそんな二人を眺めていった。

「私はそろそろ行くぞ。もう夕食の時間だ」

「はいわかりました！」

シルビアは身を翻してすたすたと歩いて行ってしまった。

渡は知り合いがいきなりいなくなってしまったので少し気まずく感じたが相手にとってはそうでもないようだ。

「さてワタルさん。兵舎を案内しますよ。……それと私には敬語使わなくても良いですよ。私に敬語の人なんて私の隊にはいませんから」

「お、おう……わかった」

渡の返事に満足すると、エリスは上機嫌で兵舎に歩き出した。

~~~~~

「兵舎の中は大体こんなもんですね」

ここは兵舎の一階の広間。

広間といっても長ソファと長テーブルが二十組づつに置かれているだけなので休憩所になっているらしい。

エリスの兵舎の案内が始まって一時間位。

本当ならばもっと早く終わっていてもいいのだが兵舎で誰かに遭うたびに声をかけられるため余計な時間を使ってしまったのだ。

「あとはワタルさんの部屋だけですが……そろそろ夕食の時間なので食堂に行きましょうか」

「ん、わかった」

渡は覚えたばかりの廊下をエリスと歩く。

広間から食堂はそんなに遠くはない。

広間からのびる一本の長い廊下の突き当たりだ。

食堂に入ると既に50人程の兵士でごった返していた。

近くにいた兵士が入ってきた二人に気がついた。

「お、噂の神の使い様が登場だ！……お嬢ちゃん、デートはもう  
終わりがい？」

「もう、ガルザックさんやめてくださいよ！」

その兵士はガルザックというらしい。

髪は所々白髪が混じっており見た目からも初老に届くかどうかと  
いった所だが彼から見えるオーラはまだまだ若い。

ガルザックはがっはっはと笑い飛ばすと渡を見た。

「ワタルっていったか。これからよろしく頼みますよ『神の使い』  
様」

ガルザックにとってははからかっているつもりらしい。

渡はぺこりと頭を下げる。

ガルザックとはそこで別れて二人はカウンターに向かった。

そこには若く、髪を短く刈った白い服を着た若者が立っていた。

「いらっしやいませエリスさん！ 珍しいですね、今日はあなたが  
最後ですよ」

若者は器にスープ、皿にサラダを盛り付ける。それらをお盆に載

せて、それから平べったいパンのようなものを載せた。  
お盆をエリスに渡すと若者は嬉しそうに笑顔になる。

「エリスさん、僕やつとこの人数分ちょうどで料理を作る事ができたんですよ！ もう鍋の中は空っぽ！ しかし皆さんにはしっかりと食べてもらっている……これほど嬉しい事はありません！」

若者はそこまで言ったところで渡のことに気がついたようだ。  
しかし渡も若者が言った事を総合して一つの真実にたどり着く。

「あなたは……確かワタルさんですね！これから空席だった四番隊の副隊……」

若者はそこまで言って笑顔のまま固まった。

そこでタイミングよく渡の腹がなる。

それを聞いてから若者の顔がどんどん青くなっていった。  
それを見て渡は確信する。

(……俺の分は、無いな)

見かねたエリスが声をかけた。

「……ワタルさん、私の半分食べます？」

その瞬間若者は光の速さでカウンターを飛び越えて渡の目の前に移動すると土下座した。

「申し訳ございません！！ 噂には聞いていたのですが本当の事と

は思わず……そこまで頭が回りませんでした！ 本当に申し訳ございませんでした！！！」

頭をゴンゴンと叩きつけながら若者が土下座する。

するとまた渡の腹がなる。

確かに朝飯を食べたが昼は食べてないので腹がなるのは当然の事である。

渡の腹の音を聞いた若者は頭を床に叩きつけるのをやめた。

渡がどうしたのかな、と思っている

「もう一回作り直してきますー！！！」

若者がまたカウンターを飛び越えて厨房に向かおうとする。

だが今度はカウンターに足を引っ掛けて頭から落ちてしまった。

そのまま動かなくなる若者。

「……後で言うておきますからとりあえず食べましょうか」

エリスはお盆を渡に任せると皿を取りに厨房の中へ入っていった。

~~~~~

「さつきはすみませんでした……れていなかったのに……」

「いや、少しでも食べられただけで十分だよ。それよりもエリスちゃん、半分貰っちゃったけどよかったの？」

「ここは二階廊下。

兵士部屋は一階、隊長・副隊長の個室、事務室、会議室等は二階になっている。

「いえ、いつも残してしまっているので構いませんよ」

「そう？　ならいいけど」

誰もいない廊下を二人は並んで歩く。

二人の個室は食堂から反対の位置にあるので歩いて移動するには一苦労する距離だ。

「明日からはしっかり作らせますので……」

「いいよそんな。そんなに気にしてないし」

エリスはさつきからこの調子だ。

渡としては本当にそれほど気にしていないから本当にいいのだが。

「うっ……そういつていただけるとありがたいです……」

エリスは自分が失敗したみたいにしょんぼりしている。  
心の優しい子なのだろう。

エリスは渡よりも頭ひとつ分くらい小さいので渡がちょうど見下ろしやすい。



そのしょんぼりした頭を見下ろしているとエリスは立ち止まった。

「ワタルさんの個室はここですよ」

いつの間にか個室についていたらしい。

「私はワタルさんの向かいの部屋ですので何かあったら来てくださ  
い」

渡は女子の部屋に行こうという気にはならなかったがとりあえず  
頷いておく。

「では明日からワタルさんも訓練に合流しますので心の準備をして  
おいてくださいね」

「うん、わかった」

「朝食の時間になったら呼びますので。……ではおやすみなさい」

エリスはぺこりとお辞儀すると渡の部屋の向かいの部屋の扉を開  
けて入っていった。

渡も個室に入る事にする。

そこには机、棚、ベッドなど必要な物しか置かれていなかった。  
一人になって安心したせいか、いつきに睡魔が襲ってくる。

（明日も早いらしいし、寝るか）

ベッドに潜りこむ渡。

（そういえばこの世界に来てからまだ一日もたってないんだなあ…

…)

自分の順応力にちょっとため息が出る渡。

少しの空腹を感じながらもだんだんと意識が遠くなっていた。

く長い一日く（後書き）

ちよつとむりやりすぎかなあゝと書いてみてから思いました

とりあえず何故薙刀？つてくるかもしれませんがこれは古本屋で三  
国志を立ち呼んだ後に駅で薙刀部の方らしき人を見たからです！

これはやるしかねえ、と思ったのですが自分でもおかしいかなと思  
いました。

そこらへんは許してください・・・

え？許さない？・・・えつと、すみませんでした。

これから精進いたします・・・

感想お待ちしております^^

ゝ初陣ゝ（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

く初陣く

「ワタルさん、遠征ですよ」

「遠征？」

「はい、なんだか魔獣討伐の命令だそうで」

「……ふーん」

渡がこの世界にきて、また四番隊に入隊してから1週間がたった。その間に渡は隊員たちとも仲良くなったし訓練もこなしてきた。だがその訓練で気がついたことがあった。

確かに元の世界よりは丈夫になったと思う。

しかしミーシャとの決闘の時のような急加速みたいなものが出来ないのだ。

だからこの一週間はずっと薙刀の訓練や隊員と組み手しかしていない。

そう悩んでいる所にエリスが来た。

「何かもつと反応はないんですか？ワタルさんの初陣ですよ」

「別に……そうでもないかな」

ここは二階の会議室。

ここにいるのはエリスと渡だけだから別に会議室でなくてもいいのだが。

「出発は明日です。心の準備をしていてくださいね」

「っ！ 明日!？」

渡には初陣よりも明日という事実の方が驚きだった。

「なんでそんないきなり……」

「いつもこんな感じですよ？ なんだか昨日屋敷宛に手紙が届いたそうで。他の部隊は再編成とか隊長が不在とかでまともに動ける部隊がウチしかないんですよ。姫様もワタルの初陣にぴったりだって入ってました」

……あの小娘が。

渡が黒いオーラを発していると、エリスは大きな紙を何枚か取り出した。

「こっちの紙が現地付近の地図。こっちの資料は予想される魔獣の一覧と情報。この紙が部隊編成用です」

「部隊編成？ 大体把握してるし、いらなんじゃない？」

渡がそういうとエリスは渡に教えるようにいった。

「確かに把握してはいますが……五十人強の人数をそのまま突っ込ませるわけには行きませんか？ 隊をさらにいくつかに分けて行動するんです。それぞれの配置をこれに書くわけです」

エリスは部隊編成の紙を渡とエリスの間に置く。

「それぞれの個性や能力、さらには互いの相性などいろいろな事を考えて編成しなきゃいけないんです。そこが隊長と副隊長の大変なところですねえ」

ワタルさんが来たから少し楽になりますけど、とエリスははにかんだ。

「ま、うちの部隊はみんな仲いいですし相性やら何やらは特に考えなくてもいいんですよ。ワタルさんにもそのうち任せるかもですから早めに隊員の特徴を掴んで置いてくださいね？」

そんなことできんのかな、と渡は不安になったが一応頷いておく。エリスは渡に部隊編成の紙を一度見せると自分の前に戻してさらさらと何かを書いていく。

恐らくそれが部隊編成なのだろう。

エリスは何かつぶやきながらその紙に集中してしまう。

一人ぼつんと残された渡は暇なので地図と魔獣情報の紙を見ている。

地図の方は現代とは違って記号やらなにやらは無いが結構簡略化されているので見やすかった。

見た所森の中に一本の道とそれに沿って川があり、その奥に村があるらしい。

道は比較的まっすぐで森の真ん中を道が川とともに両断している。

次に魔獣の情報が書いてある紙を見てみた。  
すると、

「エリス、文字が読めないんだけど……」

エリスは机の上の紙から顔を上げると首をかしげた。

「文字……ですか？ワタルさん文字読めないんですか？」

「いや、読めないっていうかこの文字を知らないというか……」

エリスはますます首を傾げると、

「この文字を知らないって、神の使い様なら文字くらい知っていても……」

「俺この国の人間じゃないし……てかこの世界ですらないしな」

それを聞くとエリスは納得したようだった。

「そういうことですか。……ワタルさんの世界や国ってどうですか？ぜひ教えて欲しいんですけど」

エリスは目を輝かせる。案外好奇心旺盛なのかもしれない。

（見た目もそんなに歳とってなさそうだし、子供っぽいってのがしっくりくるけどな）



渡はぽつりと心の中でつぶやいた。

「まあ話してもいいけど、そっちはどうなの？ 俺の話は絶対長くなるけど」

「ああ、それもそうでした……こつち先に終わらせて、それからワタルさんに教えてから……じゃ遅いですね。またいつか教えてください」

エリスは明らかにしょんぼりしている。  
見ていて面白いぐらいに。

渡はそんなエリスを見ながらエリスの横の席に移動する。

「じゃあ先に部隊の説明をしますね。ワタルさんはまだ初めてなので私の隊に入ってもらいます」

エリスは渡に紙を見せながらいった。

「部隊は三つに分けます。真ん中が私、脇に二つの隊です。戦闘要員は50人。後の何人かは回復専門なので後ろに控えていてもらいます」

エリスはそこらへんにあったペンやらインクやらを使いながら隊の陣形を説明していく。

「各部隊前後に分かれて戦います。ただの殲滅戦だったら全員突撃してもいいんですが今回は後ろに村がありますから壁を作るんです。部隊を三つに分けるのは横に広げると私の指示が届かない場合がありますからです。指示が無く混乱するよりは多少指示が違っていても部隊を分けて行動させる方がいいんです。まあそこから生まれる混乱

もありますがうちは優秀なのでそんな事はないと信じます」

幼い割にはしっかりしていて渡はびっくりした。

自分がこの位の頃にはいつも友だちとゲームで遊んでいたはずなのだが。

小学校時代はまだいじめは受けていなかったのだ。

「何か質問はありますか？」

ぼんやりしている所に話しかけられたので渡は虚を突かれた。

「ああ、いや……特にないよ」

渡が笑ってごまかしたがエリスは気がつかなかったようだ。

エリスは部隊編成の紙を脇にどけると魔獣情報の紙を取り出した。

「あとはこれですね……。ちょっと長くなりますが構いませんか？」

「うん、別に構わないよ」

ならば、とエリスはこほん、と咳を一つする。

「そもそも魔獣には大きく分けて二つあって、一つは憑依型。もう一つは瘴気型です。どちらもその名の通り生き物に憑依するか瘴気がそのまま魔獣になるかなんですけど、どちらにも特徴があります。憑依型は戦闘能力が高いです。まあこの世に存在している生物を糧としているわけですから当然ですね。その生き物の限界を超えてしまうんです。瘴気型は核を叩かない限り無限に増殖します。……まあこれは獣と違っていいのか分かりませんが、どちらも面倒というのは確かです。魔獣は無差別に破壊を繰り返すのでそこに住んでい

る住人からしてみればとても危険な存在です。そういうわけでただの獣の討伐ならば例外を除いて各砦に駐在している兵士が行くわけですけど、このような魔獣の場合は直属部隊が派遣されるわけです。

「

渡はエリスの長い説教のような教えに圧倒された。  
学校にもこんな先生がいた気がする。

「今回の魔獣は瘴気型ですので長期戦が予想されます。なので作戦を立てました」

「作戦？」

「はい。それは……」

渡が注目して聞く。

「隊の事は他に任せてワタルさんと私で突っ込みます」

（それって作戦じゃないでしょ……）

渡はあまりの作戦に呆れた。

エリスも渡の様子を見て呆れているのが分かるらしい。

「いや、作戦じゃないだろか思ってるかもしれませんがこれが一番手っ取り早いんです！魔獣は村のさらに奥の方で発生しているみたいですから後ろには漏らせませんし……」

「でも結構無理あると思うよ？だって二人だけって・・・」

「ワタルさんがこのまえの決闘みたいなのを出せばちょちょいのちょいなんです！……隊長命令です！ 突撃しなさい！！」

そういつのつて職権乱用っていうんじゃないかな、と渡はまた呆れる。

だが渡がこの前のをできれば一気に終わる事も事実だろう。仕方が無いので了承する事にした。

「わかりましたよエリス隊長……。でそれはいつ皆に言うんですか？」

「・・・これが終わったら早く言わないといけません。まあ遠征の件についてはもう言っているのだから編成だけです。これは私がやるときですのでワタルさんは準備でもしててください」

エリスはそういつて立ち上がるとテーブルの上の紙をまとめ始めた。

「ではこれで終わりにします。あとは自分の装備の点検でもしていただきます」

エリスは一度お辞儀をしてから会議室から出て行った。

渡は一人会議室に残される。

「……じゃあ部屋に戻りますか」

渡はそういつて立ち上がり私室に向かった。

くくくくく

装備の点検といつてもやり方がわからなかった。

とりあえずマイ武器を布で拭いたり、この前貰った砥石で見よう  
見まねで研いでみたりしたのだが。

前よりはちよつとだけ鋭くなつたような気もする薙刀を見て渡は  
ため息をつく。

（初陣か……まさか死にはしないよな）

既に死んでいる渡だがもう一度死んでもいいという気には全くな  
らなかった。

渡はベッドにごろんと横になる。

何もすることが無いのでとりあえず夕食の時間まで寝る事にした。

くくくくく

「……さん、ワタ……さ、おきてください!」

渡は誰かの声に目を覚ました。

誰かが渡を見下ろしているらしいがぼんやりしていて良く見えな  
い。

「ワタルさん! ……あ、起きましたか?」

渡を見下ろしていたのはエリスだった。

部屋は暗く、もう日も暮れてしまったのだろう。

「もう夕食の時間です。早く食堂に行かないとまた食べるものがない  
くなりますよ」

渡はむくり、と上体を起こす。

「う……ああ、分かった。ありがとう」

「はやくきてくださいね」

エリスは渡に笑いかけると部屋を出て行った。

渡もベッドから這い出て目を覚ましてから食堂に向かった。

食堂はもう大体が食べ終わっていたのかがらんとしていた。  
いるのはエリスと数人の兵士だけである。

渡はカウンターに向かう。

「いらっしやいませワタルさん。寝ていたそうですが……疲れてました?」

「いや、そんなことはないよ。横になってたらいつの間にか寝てただけだし」

カウンターの若者は料理の載ったお盆を渡しながら話しかけてきた。

「明日は遠征だそうですからしっかり疲れを取ってくださいね」

「うん、ありがとう」

渡は片手で若者に手を振って手近にある席に座る。

献立はスープとパンと大きな焼かれた肉が一切れ。

献立としては寂しいがそれぞれの器が大きいのでこれだけで満腹になる。

しばらくして食べ終わるとカウンターにお盆を返す。

周りを見渡すとさっきまでいた兵士はいつの間にかいなくなっていて、食堂には渡とエリスしかいなくなっていた。

しかもエリスはまだ大きな肉とパンと格闘している。

渡は何気なくエリスの向かいの席に座った。

「まだ食べてるの?」

エリスは話しかけられて初めて渡に気がついたらしい。

「ムグ……あ、ワタルさん……」

エリスのお盆を見てみるとまだ半分くらいしか減っていなかった。

「あの、これお願いします！」

エリスはそういつてお盆を丸ごと渡によこす。

「いや、俺も今夕食食べたばかりだし……」

「たくさん食べないと大きくなりませんよ！さ、お願いします！」

大きくなりたいのはあなたの方では？ と聞きたかったがややこしくなりそうなので仕方なく食べる事にする。

だが、

（ん？もしかしてこれって間接……）

エリスはもう満腹を超えているらしくお腹を押さえて苦しそうにしている。

悩んでいるのは渡だけのようだ。

渡は意を決してスープに口をつける。

（……ちよつと冷めてる）

味に変わりは無かった。

エリスはまだお腹を押さえて唸っている。

相手が気にしていないのに自分だけ気にするのも何か変なので無視して全部平らげる事にする。

まだ半分残っている夕食と格闘していると苦しみから解放された



エリスが声をかけた。

「うつ……そういえばワタルさん。明日の服装はその『じゃーじ』とかいうのでいいんですか？」

渡は料理をほおびながら答える。

「んぐ、ほえしはないし。いいほ」

これしかないし、いいよ、といったつもりなのだがエリスにはよく分からなかったのか解説に時間がかかった。

「いや、ワタルさんの神の国から持ってこられた唯一の物ですからぼろぼろになるのはどうかな、と思ったんですが……それでいいならいいですよ」

「……服って貸してくれるの？」

「はい、ワタルさんにも服は支給されますよ。なんかそれを気に入っているようでしたので今まで言いませんでしたが」

渡は今までジャージを夜の内に洗濯して夜は全裸で寝て、朝にちよつと湿っている服を身にまとして生活していたので有り難い話だった。

「出来れば貸して欲しいなあ。いままで朝湿ったままだったからさ」

「そうですか。じゃあ明日の朝までに一式用意させときますね」

エリスはそういつて手元にあったコップの水を一口飲む。

渡は再びお盆に視線を落とし、スプーンとフォークを武器に格闘を始めた。

エリスはただ無言で渡が料理と格闘している様を眺めていたので渡には少し気まずい空気が流れる。

しばらくその空気が続いたが渡が夕食に勝利するとエリスはそのお盆を持って席を立つ。

「ありがとうございます。いつもだったら他の誰かに食べてもらうんですが今日は遅れてしまっただけ誰もいなかったんですよ」

エリスはカウンターにお盆を返すと渡と一緒に部屋へ戻った。

（こんなに食べちゃあ眠れそうに無いな・・・）

~~~~~

次の日。

「渡さん、おきてくださいよー」

渡は誰かが扉を叩く音で眼を覚ます。

「渡さーん？入りますよー」

その声とともに扉のノブがガチャリ、と動く。

「んな……待つて！俺今……」

渡の声は最後まで届かず扉からエリスが入ってきた。  
しかし渡はいつも通り全裸で寝ている。

布団をかけて寝ていたのが不幸中の幸いだった。

エリスは口を開きかけたがそこから声が出ることは無く、代わりに顔がみるみる。赤くなっていく。

「……っ！」

エリスは持っていたものをその場に落とすと走り去ってしまった。  
たぶん昨日言っていた服の一式を渡の部屋に届けようとしたのだ  
ろう。

「……一応後で謝つとくか」

どちらも悪いわけではないのだが渡には申し訳なさがあった。

とはいえそのまま裸でいるわけにはいかないのでエリスが落として  
いった服を着ることにした。

その服は見るからに『布の服』といった感じで、普段着のようだ。  
渡はその服を着てから食堂に向かった。

食堂は既に混雑していて人ごみの中に潰されそうになった。

渡はやっとの事でカウンターにたどり着くと若者に声をかけた。

「おはよう。俺の分の食事をくれるかい？」

「あ、おはようございますワタルさん。今日はあの服じゃないんですね」

初日から散々だった若者とも冗談を交わす事ができるほどの仲になっっている。

若者は渡と話しながらもお盆に料理を盛り付けていく。

「今日の昼に出発らしいですからね。準備はしっかりとしていてくださいよ？」

「ああ、分かってるよ。じゃあ」

渡は若者と別れると空いている席を探したが見つからなかった。仕方が無いので広間で食べる事にする。

お盆を持って広間に行くとそこでは数人の兵士とエリスがいた。

渡は動揺してお盆を落としそうになる。

(……よし、こんなんで動揺してられるか！)

渡は意を決してひとつのソファを選んで座る。

エリスも渡に気が付いたらしく一瞬吹き出しそうになるがこらえた。

エリスはいろんな意味で顔を真っ赤にさせていたがようやく落ち着いたらしく手元にあったコップの水を空にする。

そうしてエリスは渡に笑いかけた。

渡もエリスに笑いを返す。

エリスは目を瞑ってなにかを唱えらるとお盆を持って立ち上がり、

渡に近づいてきた。

渡は少し身構えてエリスを見る。

「……こほん。ワタルさん先ほどはすみませんでした」

「いや……別に、いいよ」

緊張しているせいか二人の動きはぎこちない。

「それでお詫びをしたいんです」

渡がそんなのいいよ、と言おうとしたのだが、

「この朝食半分上げます！ それでは！！」

渡に半分以上残った朝食を押し付けて走り去ってしまった。  
しばらく呆然としていた渡だったが、

（丁寧に見えて結構子供っぽい事するんだな）

年相応の行動にちょっとだけ親近感を覚えたのであった。

くくくくく

「ではこれから遠征に出発します。各自準備はできていますね？」

ここは四番隊の兵舎前。

隊員全てがここにあつまっている。

脇には馬車が数台ほど。

「では、出発！」

エリスの一声で四番隊が遠征に出発した。

「つ、疲れた……」

「ワタルさん情けないですよ？まだ出発して一日と半分。ほら、後半日もすれば村につきますから」

出発してから一日と少し。

渡は完全にへばっていた。

「なんで皆びんぴんしてんの？丸一日くらい歩き詰めなのに……」

「そういう風に鍛えられてるんです。……仕方ないので馬車の荷台にお邪魔しててください」

渡はエリスの言われたとおり、馬車の荷台に乗り込む。  
馬車の荷台は幌が付いていて、その中には干し肉などの食料が  
まわっていた。

「……ふう」

渡はその荷台に腰掛ける。

馬車は列の後ろにいたので、渡の視界にはただ森の道が続いていた。  
馬車はごとごとと荷台を揺らしながら進んでいく。

渡は故郷のことを思い出した。

森の緑なんて全くなくて、緑といえば街路樹のみ。

周りは背の高いビル。アリの巣のように張り巡らされた地下街。  
なんの思い出もなかった故郷だが、今更帰りたくなってきた。

（母さん、父さん、今頃何やってるかな三手…）

渡は誰もいない荷台でため息をつく。

その時。

「よ、元気にやってるか？」

驚いて後ろを振り返るといつだかのロリータ神が樽の上に腰掛け  
ていた。

「んなっ！ 何でお前ここにいるんだよ！」

「声がでかい馬鹿者！ 外に聞こえるぞ」

渡は荷台から馬車の前を見える。

とりあえず誰も気が付いていないようだ。

「んで？ 神様が何の用でございますか？」

神は大きくため息をついた。

「それが困った事が起こってな……」

神は言葉を続ける。

「その前に私がお前をこの世界に生き返らせたのは理由があるんだ」

「この前なんとなく言って言っただじゃん」

すると神はまた大きくため息をついた。

「お前はアホか。いくら神とはいえなんとなくで生き返らせると思っているのか？」

「出来るからやっただんじゃないの？」

今度は神は頭を抱えた。

「なんで私はこんな馬鹿野郎を選んできたのか……どうしようもない馬鹿だ……」

これには流石の渡も黙ってられない。



「なんだよ人のことを馬鹿馬鹿って！ お前が俺を生き返らせたのが悪いんだろう！？」

神は素直に頭を垂れた。

「うん。私が悪かった。すまん」

「謝るなよ！！」

思わず思い切り突っ込んでしまったが、静かにしなければいけないの思い出して口をつぐむ。

「まあ冗談はこころへんにして、本題に入るぞ」

渡は神に耳を傾ける。

「さっきいったお前をここに生き返らせた理由だが、やってほしいことがあるからだ」

「やってほしいこと？」

「ああ。それは……」

神は一呼吸置いてから言った。

「魔王、と呼ばれている奴を倒して欲しい」

渡の頭の上にはてなマークが浮かぶ。

「おい、はてなマークがみえみえだぞ……。まあよーするにこの世界の魔王を倒せっていうわけだ」

「なんで俺が勇者みたいな事しなくちゃいけないんだよ」

「お前がああタイミングで馬鹿な死に方をしたからだろうが」

いきなり凶星を突かれて渡は何もいえなくなる。

「そいつはこの世界では知る奴は誰もいないんだが、他の世界ではとんでもない奴だったんだ」

「どんな？」

「あいつは生まれつきありえないほどの魔力の持ち主でな、最初は良かったんだがだんだん狂い始めて、最終的にはあいつは世界を渡ってしまった。神である私が特例として渡らせたお前はいいんだが世界の住人が勝手に世界を渡るのは非常に危険な事だ」

神はさっきまでの冗談はどこにもなく、とても真剣な顔だ。

「だから私はそいつを殺さねばならん。しかし他にもやることはたくさんある。だからお前みたいなのが必要になったわけだ」

「ふーん、じゃあ結構急がないとやばいの？」

「できれば、な。だがお前がこのこいつでもただ殺されるだけだからちゃんと鍛えてからだ。いいな？」

神の言葉に渡は頷く。

「よし、ならばいいだろう。私は帰る。誰か近づいて来たみたいだしな」

渡がはつと振り返るとひょこつとエリスが顔を出した。

「ワタルさん誰かいたんですか？ 話し声が聞こえたんですけど」

エリスの問いに渡はぶんぶんと首を振る。

「いや、誰もいないよ！ 気のせいじゃないかな？」

「ならいいです。……そろそろ着きますから準備してくださいね」

エリスはそういつて前に戻ってしまう。

渡は大きいため息をついた。

（危なかった……。じゃそろそろ降りるか）

渡は荷台を降りると先頭に向かう。

まっすぐな道の先に村の門が見えた。

「遠路わざわざ疲れたでしょう。とりあえずお休みになさってください」

村に入ると村長らしき白髪のおじいちゃんが出迎えた。

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて」

エリスが合図をすると兵士たちはテントを張りに散らばる。  
村長はエリスに声をかけた。

「ちょっとお話があります。よろしいですか」

「はい、なんでしょう」

「いえ、特別なものではないんですが……。今回私たちの村を襲った魔獣ですが、報告したとおり瘴気型とおもわれます。しかし……」

「しかし？」

「しかし、瘴気型なのに強さが類を見ないほどなのです。この村の猛者も討伐に向かいましたが返り討ちに遭いました。どうかお氣をつけ下され。何かできることがあれば我々も協力します」

「ありがとうございます。何かあつたら頼らせていただきますね」

エリスと村長は礼をするとそれぞれの方向へ歩いていった。

「さてワタルさん。明日の早朝、魔獣討伐に向かいます。今日は疲れをしっかりとってくださいね」

「うん、わかったよ」

「では私も夕食を作りにいきますか」

隊員たちは円形にテントを張っていて、その中心が火になるよう

になっているらしい。

男性隊員はテント設営、女性隊員は火おこしと食事作りをしているらしい。

渡とエリスは別れて、それぞれの場所に向かった。

渡はテント設営を手伝おうとしたがやり方がわからないために茫然としていた。

「おい、ワタル！　ぼけーっとしてないでこっち手伝えよ！」

声の方向を振り返るとガルザックがいた。

後何人かでテント設営をしているらしい。

「いや、テントの建て方なんて分からないですよ、俺」

「んなこたあどうでもいいんだ。見て、やってみて慣れる。それだけだ」

ガルザックはそれだけ言うと手元に集中してしまう。

このままでは居場所が無いのでとりあえずなんでもいいから手伝う事にした。

しかし、

「釘はもう打ってるだろ」

「布はそこに広げてるし」

「ちょ、そこ違っつて！それはこっち！」

「いやだめ！　やめっ、やめろおおおおお！……！」

いろいろあった結果、渡は男子から追い出された。  
ガルザックも、

「いや、テント張るだけが貢献じゃねえしな……女共手伝って来い？あつちは人手が足りてないはずだしな」

やんわりと否定した。

（うつ、ガルザックさん酷い……慣れろって言ったのに……）

渡は洪々テントの中央に向かう。

そこでは既にキャンプファイアーみたいな炎がごうごう燃えていた。

「あれ？ どうしたんですかワタルさん。テントは終わりました？」

渡に気がついたエリスが振り返る。  
つられて他の女性隊員も渡を見た。

「それが、テント張ろうとしたら邪魔になって……追い出された」

そこにいる全員の目が冷めるのを渡は感じた。

「ワタルさんって凄い人って聞いてましたけど……」

「うん、なんか……」

「いや、ミーシャ隊長を倒したって言ってたし……」

「でも流石にねえ……」

好き放題に喋る女子の言葉にさっきまでいじめられていた渡はとうとうきれた。

「うるさいな！ テントの張り方分かんかったただけで他ではもつとできるし！！」

「じゃあ水汲んできて。もっとできるんでしょ？」

気づいた時には時既に遅し。

（くっ、嵌められた！）

「よろしくお願いしますよ、ワタルさん」

金髪の背も高く起伏も激しい女が渡にバケツみたいな桶を渡してくる。

そのエリスは少し離れた所で申し訳なさそうな笑みをこぼした。エリスとは何もかもが正反対だ。

渡はそんなエリスをまぶしく思いつつおとなしくすぐ近くの小川に水を汲みにいった。

小川はテントのすぐ後ろにあり、さらさらと音を立てて水が流れている。

渡はそこから水を汲んで火の近くの寸胴に入れる。それでも溜まったのはほんの少し。

（なんて気の遠くなる作業だ・・・）

渡は思わずため息を付いたが他で役に立てるような仕事はない。仕方なく黙々と水汲みをこなすしかないのだ。そう心に決めて小川と寸胴を往復するのだが、

（これほんとに溜まってるか？）

何回往復しても増えている気がしないのだ。

周りの女は全員食材の準備をしているし、男もテント設営が終わったのか荷物の確認をしている。

渡は気のせいだ、と頭を振って水汲みを再開する。そろそろ疲れて息が切れてきた頃、

「絶対溜まってないよこれ！！　ここまでやってるのに空ってどゆこと！？」

渡がほえると後ろにいたさっきの金髪がぶるぶる震えている。

渡がそちらに視線を向けると金髪も気が付いたらしく口を押さえ、て後ろを向いた。

「お前かあああああああ！！！！！！」

渡は桶を振りかざして金髪に殴りかかる。

だがここまで溜め込んだ疲労で足がもつれて転んでしまった。起き上がろうとしたがそのまま意識が遠くなる。

（やば……眠い……）

疲労困憊の渡が襲い来る眠気に勝てるわけが無く、そのまま意識はブラックアウトした。



(あんのやろっ……ぶっころ)

~~~~~

渡が目が覚めたときには辺りはもう真っ暗で、人影も見えないのでもう皆寝てしまったのだろう。

渡はテントから少し外れた木にもたれかかっており、誰かがここまで運んでくれたのだろう。

渡の頭はぼんやりしていて状況がよく掴めない。

(たしか、水汲みしてて……)

立ち上がりながら思い出そうとしたとき、腹が鳴った。

「……腹減った」

そういえば、と夕飯を食べていないのを思い出す。

「飯まだ余ってるかな……」

渡は火の近くに寸胴を見るとその中身を確認する。  
そこには、

「何にも無い!？」

渡は絶望した。

そこで記憶が一気に頭に流れ込んできた。

あんなに頑張ったのに、あんなにがんばったのに、アンナニガン  
バツタノニ……。

あのクソアマ……!

渡が標的を確認し、搜索を開始する。

と、その時。

「あ、ワタルさん起きました？」

どこからかエリスが現れた。

「あれ？ 皆寝たんじゃないの？」

その言葉にエリスは苦笑いする。

「他の人は皆寝ちゃいました」

エリスの手には空の皿とお玉が握られている。

「先ほどはすみませんでした。あの子普段はいい子なんですけど今日  
になっていきなりワタルさんにいじわるしてしまっ……」

エリスの言葉にさっきまでのイライラが吹き飛んでしまった。

「そんな……いいよ。エリスが悪いわけじゃないし」

「本当にすみません……。お詫びといつては足りないかも知れませんが、夕食を少し残しておきました。……食べます？」

渡は目を輝かせる。

この子は天使なのか？

「……いいの？」

「ええ、ぜひ」

渡は思わず目頭が熱くなる。  
なんてよくできた子だろうか。

「早速頂いていい？」

「じゃあこっちに残してますのでついて来てください」

エリスはそういつてさっきの小川の方へ行く。

そこでは小さな焚き火があつて、その上に鍋があつた。

鍋にはおいしそうなスープが温められていて、渡の鼻をくすぐる。

エリスは持っていた皿にスープをよそくと、渡に差し出した。

渡はエリスからスープを受け取るとスプーンを使わずにがぶがぶ飲み始めた。

「もう一杯！」

はい、とエリスは笑って受け取るとまた皿によそう。  
それを三回くらい繰り返した所で渡は止まった。

「ふいゝ、ごちそうさま」

「はい。パンもあつたんですがそれは皆食べられちゃいました」

「いや、あれだけでもありがたいよ。ありがとう」

それを聞いたエリスは少し恥ずかしそうに笑った。

「じゃあ明日に備えて早く寝ましょう。皆寝てるのでテントは使えませんけど」

「そうか……どうしようか」

「まあこのままここで寝ればいいですよ」

エリスは自分の荷物を枕にするとそのままごろんと横になる。

渡としては女の子と寝るなんてとんでもない事だったが、仕方が無いので横になる。

エリスは横になったまま渡に笑いかけるとそのまま目を閉じる。

渡は顔が熱くなるのを感じたがぶんぶんと頭を振って目を閉じた。緊張して寝られないと思ったがまだ疲労が残っているらしく、すぐに眠気が襲ってきた。

~~~~~

「ワタルさん、起きてください」

すぐ耳元で声がする。

「ん？」

目を開けると目の前にエリスがいた。

「うわっ」

「あ、起きましたね。」

渡はむくり、と上体を起こす。  
よく見ると昨日の金髪もいる。

「ほらペル、ちゃんと謝らなきゃ」

その金髪はペルというらしい。

謝るとは昨日の事だろう。

どうみてもペルのほうが姉な感じなのだが今はエリスが姉みたいだ。

そのペルは露骨にいやそうな顔をしている。

（俺って彼女に何かしたっけ？）

渡にはいまいち理由が分からなかった。

「どうもすみませんでした」

反省の色が見えないどころか、お前が反省しろやボケと目で語っている。

とにかくペルは渡のことが嫌いらしい。

ペルはそれで謝ったつもりなのかそのまますたと去ってしまった。

「すみません。普段はあんなじゃないんですが……」

「いや、いいよ別に。そういう事もあるさ」

エリスはしばらくぺこぺこと渡に謝っていたが、どうにか渡がなだめて朝食を食べる事にした。

渡は結局スープしか食べてないので空腹感を通り越してお腹の辺りに喪失感がある。

渡はその日の朝食をがつがつと食べた。

だが他の隊員からは特に嫌がられることは無く、逆に同情の目で渡を見ていた。

中には自分の分まで差し出す隊員もいたが、流石に渡は断った。朝食を食べ終わると手早く準備をする。

装備の確認、携帯品の確認、テントの片付け等。

渡はテントの片付けもできないし、ペルもいるし、荷物も何も無いので結局流れる小川をただ見ていた。

さらさらと流れる小川を膝を抱えて眺めていると後ろから声をかけられた。

「おいワタル！ そろそろこっちこい」

振り向くとガルザックが立っていた。

「はい、分かりました」

渡はよいしょ、と立ち上がると戻っていった。

「あ、戻ってきましたね」

見ると全ての隊員が整列していた。  
しかし兵舎に並んでいた時とは違い、三つに分かれている。

「これから魔獣討伐に向かいます。作戦通り部隊を三つに分け横に  
します。魔獣は後ろに漏らさないで下さい。以上！」

エリスの簡単な説明が終わると一息置いていった。

「出発！」

道は村の外をぐるりと回って反対側にいくような感じた。

反対側に付くと獣道しかなく、森の中を木を避けながら行動する  
事になった。

隣の部隊がぎりぎり見えるくらいの距離を保ちつつゆっくりと前  
進する。

辺りは隣の人の息遣いまで聞こえそうなほどひっそりとしていて、  
それが逆に緊張感を煽らせた。

渡はまだ戦闘の経験が無いので全方位から襲い掛かれそうで辺  
りをきよろきよろと見回している。

「……ワタルさん、そんなにきよろきよろしてもまだいせんよ」

あまりにもきよろきよろしすぎてエリスに言われてしまった。

渡はあはは、と笑うがそんな事を言われても不安なものは不安である。

きよろきよるとはしないものの心の中でびくびくしながら渡は進んでいく。

そんな状態がしばらくつづいたその時。

「敵襲！」

右の方から声が上がった。

全員が右を向くが、エリスだけは前を見たままだ。

「あの子達なら何とかやってくれます。このまま前に進みましょう」

こういうところで人格が現れるんだろうなあ、と渡はしみじみ思いながら心の中でつぶやく。

ため息について前を見た瞬間。

目の前の草むららがさがさつ、と動いた。

全員が身構える。

案の定報告された瘴気型の魔獣らしい。

真っ黒の四足の獣のようで、見た目は狼みたいだ。

「敵襲！」

エリスが叫び、突っ込んだ。

だがエリスが敵に切り込む前に後ろから砲撃のようなものが魔獣



に当たり、全て吹き飛んでしまった。

放ったのはペル。

口は悪いが腕はいらしい。

だが渡にとつては魔法というのを初めて見るので驚きしか残らない。

「ペル、途中まで援護お願い！　ワタルさんいきますよ！」

「おう！」「はっ！」

エリスが突っ込むのにあわせて渡とペルがエリスに続く。

草むらを抜けるとさっきの魔獣がうじゃうじゃいた。

しかし三人は臆することなく（渡は二人につられて）その中に飛び込む。

また渡の後ろからの砲撃。

前方で大きな土煙が上がり、何匹かの魔獣が宙を舞う。

煙が晴れたときにはいくつかの魔獣が減っている。

が、数が多すぎてあまり変わっていないようにも見えた。

「ペルもういいよ！　後ろの援護に回って！」

「……わかりました」

ペルはエリスに答えると後ろへ下がっていく。

「ワタルさん、私たちは最小限の敵を倒しながらこのまま進みます！　弱点は体の中心！」

エリスはそういつつ的確に魔獣の胴を二刀流で切り捨てていく。

渡もエリスに負けるわけにはいかなかったので体の中心を狙って次々切っていく。

切られた魔獣は霧散し、跡形も無くなった。

前に進むにつれて多くなっていく魔獣を相手に二人は前への道を切り開く。

飛び掛ってくる敵をそのまま串刺しにし、挟み撃ちは体を捻ってまとめて叩き落す。

互いに互いを助け合いながら前に進んでいく（といっても渡は素人なのでほぼエリスが助けているが）。

そうして切った魔獣が100を超えようとしたその時。

いきなり魔獣がいなくなり、後ろの魔獣も追撃してこなくなった。渡は訳が分からず頭をかしげていたがエリスは前をにらみつけている。

「……ワタルさん、こいつが今回の討伐対象です」

そういわれて前を見る渡。

そこには、

「……いや、でかすぎでしょ」

4メートルを越す身長。

丸太のように太い腕と足。

二本の足で立ち、口と思われる部分からは真っ黒い瘴気が吐き出されている。

「見るからに強そうなんだけど」

「大丈夫です。ワタルさんも十分強いですから」

こいつが強いと認めているのだろう。  
エリスからも緊張の色が見て取れる。

「来ますよ！」

エリスが言うのと同時に魔獣が低く沈み込む。  
そして、  
いきなり渡に突っ込んできた。  
かろうじて反応できた渡は薙刀で受け止める。

が、

「っがはっ！！？」

受け止めきれず後ろに吹き飛ばされ、木にぶつかって止まる。  
脳が揺れ、口の中に血の味が広がる。

（くぁ……何が起こった？）

「ワタルさん！」

エリスが近寄ってこようとする。

しかし魔獣が渡を吹き飛ばした姿勢でエリスを裏拳で殴り飛ばす。  
完全に不意をうたれたエリスは何も出来ずに吹き飛ばされた。

「ッエリス！！」

渡は動こうとするが脳が揺れたためふらふらしている。  
その隙を魔獣は見逃さなかった。

恐るべき加速で渡に近づくと渡に襲い掛かる。

渡はかるうじて避けるが体に掠り、後ろに倒されて尻餅をつく。  
その渡にさらに追撃を加えようとした魔獣だったが、魔獣の動きがいきなり止まった。

魔獣の左肩を光線が貫通したのだ。

魔獣はゆっくりと後ろを振り向くと、そこには剣を構えたエリスが立っていた。

エリスは頭から血を流し、肩で息をしている。

「はあ、はあ、ワタルさんは……私が守りますから……」

その言葉に渡は衝撃を受けた。

エリスの言葉に感動したのではない。

エリスの言葉が悔しく思ったのだ。

何故自分は自分よりも年下の女の子に守られているのか？

何故自分はこんなにも非力なのか？

そう思っても魔獣は待つてくれなかった。

魔獣は標的を渡からエリスに変え、完全に渡は眼中に入っていない。  
い。

エリスはそんな魔獣に臆することなく正面から立ち向かっている。  
魔獣が低く沈み込み、エリスが剣を構え直す。  
魔獣が動くのとエリスが動くのは同時だった。  
互いに前に進み剣と拳を交える。

魔獣の拳をエリスは剣で受け流す。

エリスの剣を魔獣は多少受けつつも力で押す。

どちらが優勢か誰が見ても明らかだった。

エリスは一回でも攻撃を受けたら終わり。

対して魔獣は多少受けてもなんらダメージはない。

エリスは魔獣のごり押しを上手く避けているがいつまでも続くわけではない。

そんな死闘を見て動けない渡は自分自身が悔しかった。

（ちくしょう……！俺は何にも出来ないのか！？）

なんとかエリスを助けたい、しかし自分が割り込んでもエリスの邪魔になるだけ。

二つの意見が渡の頭の中をぐるぐる駆け巡っていた。

渡が何も出来ずに二人の死闘を見ていたその時。

戦局が変わった。

とうとうエリスが魔獣の攻撃を避けきれず魔獣の攻撃に当たる。

軽々と空を舞うエリス。

それに追撃するつもりなのか、魔獣はエリスをにらんで体を低く沈める。

その瞬間、

渡の中のなにかが外れた。

今までは目にも追えなかった魔獣が、今はゆっくりと見える。

魔獣が低く沈み、そして飛び上がる瞬間――

「やめろおおおおおおお!!!」

渡は魔獣の何倍ものスピードで魔獣に飛び掛った。

そのままのスピードで魔獣を蹴り飛ばし、左手で空中にいたエリスを抱きかかえる。

魔獣は何メートルも吹き飛び、大きな木の幹に当たってようやく止まった。

魔獣がむくりと起きて、再び渡を敵として認識する。

魔獣が渡をしつかりと見た事を確認してから薙刀の切っ先を魔獣に向けて言い放った。

「エリスは俺が守る!!!」

次の瞬間魔獣は今までよりもっと速く渡に飛び掛る。

しかし、渡にはそのスピードすら止まって見えるように感じた。

魔獣は大きく左手を振りかぶっている。

しかし、左の脇腹がおおきな隙になっていた。

渡はそこを確認してから大きく踏み込んで魔獣の腹を横に切り裂く。

渡と魔獣は背中で対峙する。

だが、魔獣の腹は両断されており、真っ黒い瘴気を撒き散らしながら上半身と下半身が離れていく。

魔獣の上半身が地に落ちると、さらさらと灰のように風に流されて何もなくなってしまった。

あつけない終わりだった。

渡はふう、とため息をつくとそういえば、とエリスに振り返った。エリスはぼかん、と目を丸くしており、状況がよく頭に入っていないようだ。

「おい、エリスー。おいってば」

しばらくエリスの目の前で手を振っていたのだがようやく動きがあつた。

「え？あれ？ワタルさん……えっと、あの……あれ？」

動きはあつたが状況は掴めてないらしい。

「ほら、もう倒したよ。あいつ」

「えー？ 本当ですか？ いやだってさっきの……」

そこまで言つてエリスは何かに気がついたのか、顔がぼんつと音がするくらい顔が赤くなる。

「どしたの？」

「いえいえ何でもないですよ！ じゃあ早く帰りましょうか！ うん、そうしましょうー!!」

エリスはそういつて立ち上がろうとするのだが、

「よいしょ……あれ？ このっ、えっと……」

「ほんとに大丈夫？」

「いえ……その、腰が抜けてしまいました……」

女の子座りをしたままうんともすんとも動けない。

「んじゃあ……ほら」

渡はエリスにしゃがんで背を向ける。

渡はこんなことはしたくなかったが女の子にあんな事をさせてしまったという罪悪感と、ほんの少しの好奇心が勝ってしまった。

「ええ！？ えつと、じゃあお願いします……」

エリスは渡の肩に手を伸ばす。

渡はそのまま持ち上げるとちよつとだけ姿勢を直す。

渡は女の子をおんぶなんてした事がなかったのだが、いざしてみると思ったよりも軽く、息遣いや背中に何か当たるものが……

（いかん！何考えてんだ俺！！）

渡は一つ深呼吸してから言った。

「じゃあ、帰ろうか」

「は、ひゃい……」

何故エリスの声が裏返ったのか渡には分からなかったがとりあえず無視してきた道を帰ることにする。



だが、

「エリス？　なんか息が荒いけどどこか苦しい？」

「いついえっ！！　なんでもにやいでしゅよっ！！？」

いくらなんでも噛みすぎだろう、と渡は思った。

でもエリスの息遣いは確かに荒いし、伝わってくる鼓動も……

（だからそれやめろ！！）

思考が変な方向にいく前に正氣に戻る渡。

頭をぶんぶんと横に振って心を入れ替える。

「そう？　ならいいけど……」

会話が終わってしまい、気まずい空気が流れる。

しばらく無言であるいていたが、いきなり渡の頭に衝撃が来た。何かと思つて後ろを見るとエリスが頭を渡に預けているらしい。

渡は寝てるのかな？、と思つたが実際には頭がショートしただけである。

だが渡にとっては気まずい空気が断ち切られたの少しだけ気が楽になる。

しばらく歩くとさっきペルと分かれた場所に來たのでそろそろ仲間と合流できるかな、と思つたのだがそうでもなかった。

思考をポジティブに切り替えてさらに進む。

だがいくらたつても誰の姿も見えない。

少し不安になった渡は早歩きになる。

そこかしばらく歩くとやっと人影が見えた。

「おい、皆ー！」

渡が小走りで近づいたのだが、

「……おう、ワタルか……。よくやった」

答えたガルザックは腹に包帯を巻いている。  
他もどこかしらに包帯等を巻いている。

激しい戦闘だったらしく、周りの木も何本かへし折られている。

「大丈夫ですか？ガルザックさん」

「このくらいの傷はいつもの事よ……。それで？ボスはお前がやったのか？」

「え？まあ、はい」

「そうか……」

その言葉にガルザックは深く息をついた。  
そして勢い良く立ち上がる。

「よし、帰るか！　おいお前ら！　この位でへばってんじゃねえぞ！　ちやつちやつと準備済ませろー！」

「いや、一日位待ったほうがいいんじゃないですか？」

「こいつらはそんな弱く鍛えられてねえよ。それと渡、できればそのままエリスをおぶっていつて欲しいんだが」

ガルザツクの頼みの意味が良く分からなかったが、断る理由は特に無いので一応頷いておく。

「ありがとう。……おいお前ら！ 準備おせーぞ！」

その言葉を聞いた隊員たちは手早く準備を済ませる。

「じゃあ俺と渡で村長に挨拶してくつからお前らは馬車に荷物積んどけ！ 分かったな！」

ガルザツクの言葉に隊員たちはやる気のなさそうな返事をするが、素早く列を作って戻っていった。

「さて村に行くか……」

ガルザツクは傍においてあったリュックを片手で持つと、村の方向に歩き出した。

少し歩いて村の門が見えてくると、そこに村長と若い青年が立っていた。

「なんと……もう終わってしまったのですか？」

「まあはい、頭を倒したのはこいつですが」

そういつてガルザツクは渡を指差す。

「なんと……そんなにお若いのによほどの力があるんですね」

「いえ、俺はただがむしゃらに戦っただけですから」

「そんなに謙遜なさらずに……。ただいま宴の準備をさせております。ぜひお越しく下さい」

村長のその言葉にガルザックはぽりぽりと頭を掻いた。

「ええと、すみませんがお礼はいいです」

「いえ、あなた様方は我々の命の恩人です。何かお礼をしないと気がすみません」

「別に私たちは礼を貰うためにこんな仕事をやってるわけじゃありませんし。いりませんよ」

村長はその言葉に肩を落とす。

「いや、でもなにかさせてください。……あれを持ってきてくれ」

村長は後ろの青年に声をかけると青年は走って村の中に行ってしまった。

しばらくすると青年は小さな包みを持って来た。

「これはこの森のずっと奥で採れたティフラの実といいます。この木の実には魔法がかかっていて、神のご加護を受けられるといわれています」

「ほう、これがティフラの実……。ずいぶん高価なものだと思うが？」

「こんなものよりも命が助かった方がありがたい。ぜひ受け取って

くだされ」

ガルザックはこれは拒まずに受け取る。

「じゃあ俺たちはこれで」

「はい、少し残念ですが帰ってしまうのならば仕方ありません。ありがとうございます」

村長が深々と頭を下げると、ガルザックは片手で返事をして帰っていった。

「ふう、じゃあこれお前食え」

「ええ！？」

ガルザックはさっき受け取ったばかりのティフラの実を渡に突き出す。

「これしかないのにあいつ等にとって行ったら絶対取り合いになる。だからここで処分しなきゃいけないわけだが、俺はもう食ったことがあるからな。だからお前が食え」

渡は思わず身を引くが、ガルザックはさっきの包みを渡にずいっと押し付ける。

「ほれ」

ガルザックは渡に真っ白な実を突き出す。  
だが渡はエリスをおぶっているので両手が使えない。

だからガルザックは渡の口に無理矢理押し込んだ。

「むぐっ」

渡はその実をもぐもぐと咀嚼する。  
しかし、

「味ないですよ？これ」

「ほう、味がない……か」

渡には訳が分からないがガルザックはうんうんと頷いている。

「ガルザックさん、これなんなんですか？」

「ああ、別になんでもない。……早く帰るぞ」

ガルザックは適当にはぐらかして先にすたすたと歩いていった。  
まった。

「ちょっと、待ってくださいよ！」

渡はエリスの位置を少し直すとガルザックをおって走っていった。  
こうして渡の初陣は終わっていった。

く初陣く（後書き）

真に申し訳ありませんでした！！

こんなに更新が遅れるとは私自身思っていました。

あれやこれやと予定が・・・え？言い訳はいらない？

はい、すみませんでしたごめんなさい

さらに精進いたします。

ゝ進展ゝ（前書き）

後書きにて重大発表！



～進展～

「ふいふ、やっと帰ってきた……」

「まだ城壁が見えただけじゃねえか。よく言うだろ？ 家に帰るまでが遠征だって」

「……それは遠足じゃね？」

~~~~~

渡たちが遠征から帰って一週間が経った。

だが特にこれといったモノは無く、何か褒賞みたいなのがもらえるかな、と期待していた渡にも少しの休暇しか与えられなかった。ガルザックによると、自分たちの仕事の内なのだから特別な獲物を倒さない限り褒賞はないのだという。

そんな事よりも渡たちが帰ってきてから小さな事件が起きた。

エリスが渡を避けるのだ。

渡には心当たりなんてないし、周りに聞いても適当にはぐらかすだけである。

そんな周りの様子を怪しく思いつつ、信頼できる仲間に相談する  
事にした。

ガルザックと食堂の若者である。

~~~~~

「はあ……」

「そう気を落とすなって。ちょっと……うん、ちょっとなんかあつ  
ただけだろう」

「そうですよ。あの時期の女の子は何考えてるのかわかりませんか  
ら」

ここは食堂。面子は渡、ガルザック、食堂の若者（最近知ったが  
名前をルポというらしい）である。

ここには三人以外誰もいないのだが、三人は一つのテーブルに身  
を寄せ合うようにしてこそそと会議をしていた。その内容とは、

「いや、会議だつてままならないし。最近はガルザックさんも来てくれるけどそれでもおかしいよ、エリス。なにか心配事でもあるのか……」

勿論エリスの事である。

流石にエリスの事が心配になったのだが、本人に直接聞くのめ気が引けるのでエリスに近く、渡と親しい人を選んだ結果、この二人になったのだ。

「まあお前が心配するほどのものでもねえだろうよ。お前は成り行きを見守つて、最後にがつんと決めればいいのよ」

「そうです。ワタルさんが心配する事じゃないです。流れに身を任せればいいんです」

その流れがわかんねえよ、と突っ込みたくなったがこらえる。

「……っ、まあなるようになるか。本人の問題だし」

「そうそう。我々が首を突っ込むことじゃありません。……さあもう遅いですし寝ましょうよ!」

渡はルポの少し無理矢理な終わらせ方を怪しく思ったが実際眠くなってきたので素直に従うことにする。

「それもそうだな……。じゃあここらへんでお開きにするか」

三人は立ち上がり食堂を出て広間に行く。

その間にガルザックとルポの二人は渡の後ろでこそそと話して

いたが渡は気が付かなかった。

「じゃあここいらで、おやすみなさい」

「おう、頑張れよ！」

「応援してますから！」

ガルザックとルポはそういつて渡に親指を立てる。

渡は良く分からなかったがとりあえず親指を立てて返した。

三人はそこで別れ、渡は二階へ向かった。

辺りは真っ暗で、不気味な雰囲気醸し出していた。

（怖いなあ……早く寝よ）

そう思って少し早歩きになったその時、

「……ワタルさん」

「ギャー！！！！」

渡は思わず２メートルも下がってしまった。

暗闇に慣れてきた目でよく見るとエリスが立っていた。

俯いているため顔の表情は良く見えない。

「どっとうしたの？エリス」

エリスは渡の言葉に肩をビクツと震わせると渡を見た。  
その目はすこし赤みがかっている。  
今にも泣き出しそうな顔だ。

「……ワタルさんを、待って、たんですけど……中々こないからここにいたら怖くなっちゃって……」

「あ、そうかそうか。ごめんね、待たせちゃって」

その声を聞くとエリスは顔まで真っ赤になった。

「いついや！ それほどじゃないですよ！？ 私が勝手に待ってただけですし！」

渡には良く分からなかったが、とりあえず元気になったようなのでよしとする。

「で？ 用事って何？」

エリスは少し固まってから、深呼吸をしていった。

「明日、買い物につき……買い物と一緒にいてくれませんか？」

何故言い直したのかも、噛んだ事もとりあえず脇に置いて置く事にする。

「買い物……別に構わないよ。休暇も余ってたし。明日買い物に付き合えばいいんだね？」

その言葉を聞いた瞬間、エリスは後ろにバタン、とぶっ倒れた。渡はいきなりの事に戸惑ったが、エリスはまた起き上がる。

「ありがとうございますっ！ ではっ明日の朝食の後でよろしいでしょうっ！」

エリスのは所々で声が裏返っている。渡はそれも脇に置いておく事にした。

「うん、わかった。じゃあまた明日」

「ひゃい！ また明日でしゅー！」

エリスはそれだけ言い残すと全力で自分の部屋に戻っていった。渡はエリスの行動を不思議に思ったが元氣そうなのでよしとする。それから渡も自分の部屋に戻っていった。

後ろにいた人影にも気づかずに……。

ゝ進展ゝ（後書き）

ここで重大発表があります！

なんと！

パソコンぶっ壊れたorz

いや、起動するにはするんだけどなんか調子がおかしくて・・・

復旧のめどは立っていません。

最悪、一ヶ月も二ヶ月も放置になるかもしれませんので報告させていただきます。

真に申し訳ございませんm（・・）m

く買い物く（前書き）

ダイナミック 土下座

ほんつつつとにごめんなさい！

何だかんだで一ヶ月ちよつとも休んでしまいましたorz  
これからも精進いたします



く買い物く

「ふいふ、満腹満腹」

「ワタルさん、あなた今日エリスさんとデートでしょう？そんなに食べていいんですか？」

「空腹で倒れるほうが格好悪いだろ。腹が減っているよりも満腹のほうが気持ちも落ち着くし」

「まあ、それでいいならいいですが……エリスさんはほとんど何も食べていきませんでしたよ？」

「……」

くくくくく

次の日。

空は快晴、これでもか！というほど太陽が照りつける。

その日差しと門の警備をしている兵士の視線が少しだけ痛い。

「お、おひゃようございましゅ……」

「エリス、流石にかみ過ぎだろ三手三點。まあ、おはよう」

ぎこちなく挨拶を交わす二人。

その後の気まずい空気に耐えられず二人は視線を宙に漂わせる。  
この空気を何とか壊すべく、頑張って口を開く。

「……今日のエリス、可愛いな」

言ってしまったから渡はしまった、と口の中で呟いた。  
それは二人の服は隊の制服だからである。

理由は二つある。

一つは緊急時のためだ。

休日くらい私服でも、という声もあるのだが、魔物の襲撃等の非常事態に私服でいるわけにはいかない。

もう一つは防犯のため。

形だけでも軍の制服をきて街を歩くだけで事を起こそうとする輩を牽制できるのだ。

そんなわけで軍属の者には特例を除いて常に隊の制服でいることを命じている。

今の渡たちも例外ではなく、いつもと何も変わらない服装なのだ。だから今日は、というのはありえないはずなのである。

渡は恐るおそるエリスを見る。  
すると、

「かわ、可愛い……？ 私が、かわ、いい。渡さんが……」

等と頬を押さえてぶつぶつと呟くエリスがいた。  
渡はよくわからなかったが、とりあえず最悪の事態を免れたことだけはわかった。

この空気を無駄にしないために渡はさらに追い討ちをかける。

「そうだよ。なんか今日のエリスは輝いてるっていうか……可愛いというよりもきれいって感じかな」

その瞬間エリスの震えが止まる。

そしてエリスの中の何かにスイッチが入った。

何かよく分からない、しかし激しい光がその目に点る。

「いいい行きますよワタルさん！」

「うわわわわっ！ ちょっといきなりすぎでは！？」

勢いよく渡の腕をつかんで走り出すエリス。

小柄な体からは想像もできないような強い力で引かれる渡。

あっという間に二人は見えなくなり、もとの静かな朝が戻る。

しかしその中に、

（よし………尾行開始です）

怪しい人影があった。

~~~~~

「えーっと、ここが薬屋。ここが肉屋。それでこれが刃物屋ですね」

渡とエリスの二人は町の中心部に來ていた。

ここはあらゆる店が立ち並び、様々なものが手に入る。

この中心部は大きく分けて北と南に分かれていて、北は冒険者や旅人用の商店街。南は生活者用の商店街である。

その品揃えも徹底的に違っている。例えば北と南に同じ『薬屋』があったとしても、北では薬草や毒消し、南では香草等が売られている。

しかし生活者であっても北の商店街に行くこともあるのだが（その逆も）。

二人は今南の生活者用の商店街に來ている。

「この刃物屋さんはあくまで包丁とかの生活用品ですから武器がほしかったら北区商店街に行ってください。略して『北商』<sup>きたしやう</sup>です」

「じゃあこっちは『南商』<sup>なんしやう</sup>っていいのか？」

「はい。まあ呼ぶ人それぞれによって名称は違いますけど」

さっきのようなエリスのテンションも説明者になった途端に落ち着いた。

エリスが街のことについてあれこれ話しながら二人は進んでいく。二人は隊の制服を着ているため少し浮いているのだがまったく気にしない、もしくは気がついていないようだ。

しかし二人はちよつとした問題二つを抱えていた。

あれやこれやと雑談を交わす二人に横から声がかけられた。

「おつ、エリスちゃんじゃねえか！ 久しぶりだなあ！」

声の方向を向くと鮮度のよさそうな魚を三枚におろしている男がいた。

丸い頭とがっちりした体が特徴で肌は浅黒く焼けている。

「エンガルドさん！ お久しぶりですね。一ヶ月ぶりですか？」

「ああ、大体そんな感じだろうなあ……。その隣の奴はこないだの……」

「ああ、はい。渡といいます」

「そうそう！ エリスちゃんは可愛いけどちよつと抜けてるところがあるから、よろしくな！」

「ああ、はい」

「エンガルドさんまでそんなことを……」

そう、二人が商店街に入ってから話しかける人全てがこの話題なのである。

布屋のおばさんにも、肉屋のおじいさんや、宿屋の番をしていた青年まで、全てである。

最初のうちは気にならなかったのだが、ここまでくるとだんだん飽きてきてしまう。

二人が抱える問題の一つである。

もう一つは、

「それはそうとエリスちゃん。あそこにこっちをじっと見てる奴がいるんだが」

これである。

実は二人が商店街に入る前から後方からなにやら視線を感じるのである。

害を及ぼすような嫌な感じではないからいい、と無視していたのだがあまりにも長いので二人もうんざりしていたのだ。

「そうなんですよ……。なにやら商店街に入るちょっと前からついてきているようで……」

「本当か？言ってくればぶちのめしてくるぜ？」

「いや、いいんです。襲い掛かってきそうにもないですし、放っておけばいいですよ」

「そうか……。ならいいが」

そういつてエンガルドは腕を組んでうーん、と唸ってしまふ。

「まあそういうことです。じゃあまた」

「ん、おお。またなエリスちゃん。ワタルつつたか、エリスちゃんのことよろしくな！」

「分かってますって」

渡はエンガルドに背中をばしばし叩かれながらその場を後にする。後ろの気配も移動しているようなのでまだまだついてきそうだ。二人は揃ってため息をひとつこぼすのだった。

~~~~~

二人は商店街を抜けて居住区に入った。周りからは子どもの遊ぶ声や井戸端会議をする奥様方がちらほらと見える。

平和な光景をしばらく二人で眺めていたのだが、そこに静寂を破るものが現れた。

「エリスさん！　ワタルさん！　緊急です！」

二人は声がする後ろを振り返った。すると隊の制服をきた青年兵士が二人に向かって走ってくる。青年兵士は二人の前で止まると膝に手を置いてせいぜいと息を切

らす。

「どうしたの？」

「はあっ、はあっ……ちょっとどころではない緊急事態が起きた！二人ともすぐに戻ってください！」

渡とエリスはその言葉に眉をひそめたがとりあえず緊急らしいので屋敷に戻ることにする。

「急いでください！」

言われるままに走る兵士に続く二人。

いつの間にか怪しい気配は消えていた。



く買い物く（後書き）

感想お待ちしております^^

ちなみにPCは直りましたよ

OS再インストールすることになりましたが^^;

## E & P 日記／エリス様防衛の日々 ？ 1

私はペル・アルマティア。

フィンカート家の次女であり、『風の妖精』と呼ばれるエリス・フィンカート様の部下である。

エリス様とは彼女がゆりかごの時から付き合いだ。

お互いに知らないことなど無いし、秘密にすることもなかった。歳は離れていたが親友、いやそれ以上の付き合いをしてきたと思っている。

だがそのエリス様との友情にヒビが入るような事件が起こった。

ヤナセワタルの召還である。

あのどこの馬の骨とも知れない野郎がこの部隊にやって来たのは確か二週間前かそこらだろう。

それなのにあの野郎は現れた瞬間といってもいいほどの短さで四番隊の副隊長となってしまった。

確かに一番隊の隊長とあんな戦いを繰り広げられては誰も嫌とは思えない。

言えないのだが……

「……あの野郎」

私は四番隊の兵舎の中で呟いた。

四番隊の兵舎は一部屋四人ずつだ。

あまり広くはないが窮屈するほどでもない。

縦長の部屋の両脇には二段ベッドがあつて、その奥に小さなデー

ブルがひとつと椅子が4つちょこんと据え付けられている。

女性が暮らすにはあまりにも質素だが、私はこの空間が嫌いではない。

それどころかとても好きである。

それは、エリス様との思い出の場所だから。

まだエリス様が隊長ではなかった頃、この部屋には私とエリス様しかいなかった。

毎夜二人でいろんなことを話して眠った。

街にできたおいしい店のこと、訓練中の愚痴、たまに恋話。

あの頃はよかったな、と思い出にふける。

毎日毎日エリス様と笑って過ごしていた。

あの頃はずっとこんな日々が続くのだと思っていた。

だが、現実とはそこまで甘くないのだ。

ある任務で隊長が戦死してしまい、当時の副隊長が隊長になったのだがその副隊長も戦死してしまった。

臨時で実力がトップだったエリス様が隊長になり、そのまま正式にその椅子に座ることになってしまったのだ。

本当ならば同時に副隊長も決めるところだが、なんだか『召還』とかいうのでそれどころではなく、先延ばしになってしまった。

そこで現れたのはあの馬の骨。

本当ならば私が座るはずだった（もしくはガルザック）席がひよっこりでてきた馬の骨に取られてしまった。

しかも先日の魔獣討伐遠征で別行動をとっている隙にあの馬の骨はエリス様をたぶらかしやがった。

最近のエリス様は前にはなかった色気がある。

そう、恋する乙女のそれと同じだ。

私にはそれが腹立たしくてならない。

何故エリス様まあのような馬の骨に惚れてしまったのか……。  
考えれば考えるほどわからない。

そもそもあの男に良い所などあるのだろうか？

考えれば考えるほどイライラしてくる。

気がつけば枕にシワが出来るほど握り締めていた。

~~~~~

あの忌まわしき現実を再度確認してから3日ほど経ったある日。  
夕食が済んで使用者一人の女性用兵舎に向かおうとした時、真っ  
暗な闇の中で何かの叫び聞いた。

私は猫人なので目と耳が常人よりも優れているのだ。

あれはあのバカ野郎の声だった。

あの野郎まさかエリス様を、と思って振り返ってみると、四番隊  
兵舎の二階にエリス様……

と、やはりあの忌まわしき「ワタル・ヤナセ」が立っていた。

二階は窓が開いているのでそこから声が聞こえたのだろう、そのときの私にはそんなことはどうでも良かった。

私は反射的に飛び出した。

兵舎から50mくらい離れてしまったがそんなものは関係ない。

日ごろの訓練で鍛えた自慢の足を使って、兵舎までの距離を2秒で駆け抜け、そのまま階段を上った。

階段の影に音もなく伏せ、顔だけは出して二人を見た。

あのバカが邪魔でエリス様が見えないが、泣いているらしい。

飛び出しそうになったがばれてしまつては仕方ないので耳に意識を集中させる。

「……ワタルさ……待っていたんです、中々……」

その言葉でエリス様が何を言おうとしているのかは分かった。

やめてください、やめてください、と心の中で叫ぶがエリス様には届かなかった。

そんなしどろもどろな言葉を聴いているうちにエリス様の言葉からとんでもない言葉が発せられた。

「明日……買い物……一緒に行つて……」

続いて、

「……別に構わないよ……買い物に付き合えばいいんだね？」

その時、私は感情を抑えることは出来なかった。

しかしどうにか声を出すことだけは理性で押し込み、全てを手に集中させた。

触っている壁がミシミシ、と音を上げながら少しだけ挟れる。ひびが入ったが壁が崩れることはなさそうだった。

しばらくそうしていたが、我に返ると二人はもういなかった。

その後の会話は聞くことが出来なかったが、二人がデートに行くという事実が分かればそれでいい。

私は決意した。

昔は私とエリス様の専用だった日記帳から目を離し、あえて声に出す。

「エリス様。あなたは私が守ります。あのような馬の骨なんか……私が殺して差し上げます」

**E & P 日記、エリス様防衛の日々    ? 1 (後書き)**

一つにまとめる予定だったのですが結局二つになってしまいました。

E & P 日記、エリス様防衛の日々    ? 2 (前書き)

なんかもう言葉も出ません。

まあ忙しかったってのもありますが（ネタが浮かばなかったのもありますが）

何というか、ごめんなさい

いつもいつも次は！と言っていますがもう正直に言います。

次は1ヶ月後かな！

ふう・・・言っちゃった

でも少しずつでいいのでちら見していただけるとありがたいです^

^ ;



## E & P 日記／エリス様防衛の日々　？ 2 ～

昨日の夜はエリス様のことが気になってまったく眠れなかった。おかげで私の目の下にはくつきりと不眠の証拠がある。

こんな状態で街の中を歩きたくはないが全てはエリス様のため。これも仕方がない。

どうにかこうにかベッドから這いおきて食堂に向かう。

いつもならまだベッドの中でまどろんでいる途中だが張り込みをしなければならぬので少し早く起きた。

しかし食堂は既に開いているようで、カウンターの奥からいいにおいがする。

カウンターに据え付けてあるベルを鳴らすと奥からルポが出てきた。

「はい、ってペルさん。今日は早いですね」

「ちょっと用事が……」

「そうですか。今持ってきますね」

ルポはそのまま奥へ引っ込む。

カウンターに肘を付け、頬杖をつく。

考えていなかったが二人のデートをどう妨害しようか。

あれやこれやと考えるが寝不足の頭と空腹のお腹では何も考えられない。

そうぼんやりとしているうちにルポが奥からお盆を持って出てき

た。

「はいどーぞー」

笑顔と共に料理の載ったお盆を渡してくる。

香ばしい香りが鼻をくすぐり、ぼんやりとした頭いっぱい広がる。

今日のメニューもおいしそうだ。

盆を受け取って手近の席に座る。

スプーンでスープをすくいながら改めて今日の作戦を練ることにしようとした。

が、なかなかスプーンを口に運ぶ気になれない。

今日の朝食のスープは小さなサイコロ状のベーコンと香草入り。

見るからに食欲をそるようなメニューなのだが、何故だか口に運ぶスプーンが途中で止まってしまふのだ。

思わずため息をつく。

何故私がこんななのかと聞かれれば、それはあの馬の骨のせいだと答えるだろう。

そして今度は深くため息をついた。

すると隣から声がかかった。

「おい、お前。どうしたんだ？」

声の方を見るとそこには朝食を受け取ったガルザックが立っていた。

「ああ、あなたですか。……今日はあなたなんかと話す気分じゃないのでどこかに行って下さい」

「今日は一段と冷たいな……。なんかあったか？」

私は一度だけフン、と鼻を鳴らしてから、

「気分が悪いだけです。……あ、今日ちょっと出かけるので」

と吐き捨てるように言った。

一瞬ガルザツクの顔が引きつったような気がしたが、私は構わず手をひらひらせる。

よく周りには、エリスさんがいないと冷たい、と言われるのだが当たり前だろうと思う。

だって、エリス様以外の者には興味なんて持てないのだから。

~~~~~

その後どうにか朝食を平らげた私は屋敷の事務所に来ていた。

一般の兵士が外出するには事務局に報告して、緊急通信用のクリスタルを受け取る必要があるのだ。

「じゃあ暗くなる前には帰ってきてね？」

クリスタルを受け取りながら、私は子供か、と突っ込みたくなるが、相手が80も越したおばあちゃんなのでやめておく。

これでも昔はかなりのやり手だったと聞いたのだが、今やその面影すら残っていない。

屋敷のやさしいおばあちゃんのだ。

そんなおばあちゃんに礼を言ってから屋敷の門に向かう。

街に出るならば屋敷の東側の門を使うしかない。

エリス様は届出を出していないようなのでまだ朝食をとっているあたりだろう。

そう思っているうちに門が見えてきた。

予想通り、門の傍には二人の門番しか立っていない。

私は門から少し離れた木の上に登り、身を隠した。

あらかじめ持ってきた暗い色の外套を身に付け、気配を消して二人を待つ。

木の上で身を隠しながらふと思う。

（エリス様に好きな人が出来るのは実はいいことなのではないか？）

頭にぼん、と出てきた問いだったがすぐに頭を振って考えを訂正する。

（あのような後から入ってきて横取りするような輩にはエリス様など似合わない！）

しかしまた別の考えが出てくる。

（私が思う奴とエリス様が思う奴は違う……）

そこに至って私は自分の行動を思い返してみた。  
今まで憎たらしくて仕方がなかった奴だが、それは私の視点から  
のもの。

エリス様の隣、と言う席を取られた腹いせをしたいだけなのでは  
ないか？

そこまで行き着いたところで私は我に返った。

ふるふると頭を振って今の考えを全て振り払った。

これから奴を尾行するのにこんな思考で臨んだらいけない。

自分で自分に小さく渴を入れ、改めて門を見る。

するといつの間にやら既にエリス様と奴が到着していた。  
どこかもつと近くに移動しようとしたが門の周りには隠れる場所  
がない。

仕方がないのでこのまま木の上に潜むことにした。  
しばらく見ていると二人に変化があった。

いきなりエリス様が奴の手を握り連れ去ったのだ。

突然の出来事にしばらく啞然としていたがすぐに気を取り直す。

(よし……尾行開始です)

~~~~~

二人は南商に来ていた。

はじめはぎこちなく歩いていったエリス様も時間が経つにつれてだんだんいつもの調子に戻っていた。

そんな二人を街の人々は少し遠巻きに見ている。

いつものエリス様ならすれ違う人々全てに声をかけられ、愛されていた存在だ。

恐らく今のこの状態を作っているのは奴だろう。

奴があまりにも浮いた存在だからエリス様もとばかりを受けているに違いないのだ。

そう思っているとエリス様は脇の魚屋と話し始めた。

なんとこれでまだ4人目である。

この街に入って話した人数が4人とはなんと悲しいものなのか！三人を見てぐぬぬ、と唸っていたがふいに三人がこちらを見た気がした。

慌てて物陰に身を潜めるが、心臓が飛び出るかと思った。

ここまでどうにかばれずに尾行できているはずだ。

しばらくしてまた三人を覗いてみるとちょうど別れたところらしい。

いそいで二人を追うことにした。

くくくくく

商店街を抜け、居住区に入ると先ほどの喧騒から一転、しずかな小鳥のさえずりさえ聞こえるほど静かになった。

エリス様はどこまで行くのか、と不安になっていたところで懐に入れていた通信用クリスタルがブーン、と唸った。

何事か、と取り出しでみると紫色のクリスタルが静かに点滅している。

クリスタルに魔力を流してやると先ほどのおばあちゃんの声が響いた。  
が、

「おら！休日を堪能してやがる野郎ども！！　今すぐ帰って来い！  
30秒以内だ！！　戦……戦がはじまるよほおおおおお！！  
！！」

！？

何だこれは！

声はたしかにあの婆さんの声なのだが、こんなに若々しいというか激しい人だっただろうか。

昔はやり手だったというし、昔の血が騒いだのだろうか、と勝手に想像する。

それよりも戦と言う単語のほうが気になる。

いったい何があったのだろうか。

エリス様のことも気になるが先ほどの通信、婆さんも含めて気になる。

それに帰還命令には違いない。

仕方がないので屋敷に帰ることにした。

気がつかれないようにそろりとその場を離れ、屋敷への帰途に着いた。



**E & P 日記** エリス様防衛の日々    ? 2 (後書き)

これで幕間的な話は一旦終わりになります。  
次はしっかり本編に戻りますので！

ゝ異変ゝ（前書き）

はい、予定より一週間も遅れてしまいました。

一週間遅れた＋一ヶ月はとても遅れていると自覚しております。

本当はもちつとはやく投稿できると思ったんですが見直していたら修正が止まらなくなりまして・・・。

しかも文章的にはまだまだ、というこの未熟さ。

自覚していてもどうにも出来ないのはやっぱり力が足りない性だろうと思っています。

次話も頑張っていきます！

## ゝ異変ゝ

走る兵士を追いかけ、屋敷への最短距離を駆け抜けた渡たちは今朝出た門に到着した。

三人とも息を切らしつつも門から奥の屋敷を覗いてみる。すると、今朝はいつものんびりとした風景があったのに対し、多くの兵士がばたばたとそこらじゅうを駆け回っていた。そしてその兵士たちの顔には焦りと不安が色濃く映っていた。

「はあ……いったい何があったんです？」

エリスが屋敷を見て兵士に聞いた。

「いや、これから説明されると思いますので姫のところに行ってください。場所は会議室です。そちらに行ったほうがより詳しく分かるかと……」

この兵士もそうとう焦っているらしくかなり早口だった。そこまで聞き取るとエリスは屋敷へ真っ先に駆け出した。渡もエリスに続き、全力で追う。屋敷の正面玄関をくぐり、ざわめく屋敷内を走り抜ける。

すると一階の一番奥、『大会議室』とプレートが下げられた部屋にたどり着いた。

エリスは年季の入った扉をスピードを落とすことなく勢い良く開ける。

中には大きな円卓と椅子、数人程の人が集まっていた。

ミーシャやデニクの姿も見えたのでここにいるのはどうやら隊長・副隊長格らしい。

上座にはシルビア。円卓には既にここにいる全員が椅子に座っていた。

「おお、来たか二人とも。まあそこに座れ」

シルビアは円卓の空いている席を指した。

二人は切らした息を整えつつゆっくりと座る。

「さて、全員揃ったので説明する。……まあ各自大体のことは聞いてはいるだろうがな」

シルビアはそう言って立ち上がり、腕を組んでこう言った。

「隣国であるエルギス帝国が我が国に侵攻してきた」

周りの一同は事前に聞いていたらしく揃ってその言葉に顔をしかめる。

エリスは予想外のことだったようで、驚いて口をぽかんと開けている。

だが、

（えるぎすって……何？）

渡だけ蚊帳の外だった。

シルビアも渡が困惑しているのに気が付いたようで、

「ああ、ワタルにはこの後でちゃんと教えてやるから今は黙ってるな？」

と、渡を制した。

シルビアはこほん、と咳をすると

「ここがエルギスとの国境に一番近い都市だ。拠点になることは間違いない」

シルビアはそこで一旦間を置き、全員の顔を見渡す。

「だが今の時点で分かっているのは何一つない。これからのことも検討しなければならないが、それはまた後で話そう。今日はこれで解散だ」

シルビアがそう言うのと渡とエリスを除く全員が立ち上がり、足早に部屋を出て行った。

さっきまで静かだった部屋がさらにシーン、と静まり返る。

少しだけ腕を組んで悩んでいたシルビアだったが黒板に何やら書き始めた。

「じゃあこれからワタルに説明してやる。エリスはどうする？ 暇だぞ？」

シルビアが黒板を向いたまま背中越しに聞いてきた。

エリスは、

「えっと……私もよく状況が読めないなので聞いていっていいですか？」

「ああ、構わん。まあそのことについては後半になるだろうがな」

と、シルビアは言うと同時に黒板から二人に向き直る。黒板にはお椀を横から見たような絵が描かれていた。

「ではまずワタルにはこの世界のことについて説明してやる。何回も言うのは面倒だから良く聞けよ？」

渡はこれから何が始まるのかやっと分かったらしく、こくこくと頷く。

「これが、私達が住む大陸『オルメルス』だ。この大陸は大体こんな形をしている」

そう言ってシルビアはお椀をこんこん、と叩いた。

「おるめるす？」

「オルメルス」

シルビアはまた黒板を向いて何か描き始めた。

「んで、この大陸の真ん中あたりから北の海岸まで連なるのがアルザ山脈。ここは空でも飛ばない限り乗り越えることは誰にもできない。北の端っことは通れるがな」

シルビアはお椀の真ん中から太い線を上までくねくね引いていく。

「この山脈の一番南のところから左下の方に流れてくのが、ヴィネジャ運河」

そしてシルビアは山脈の南端からさらに左下に線を引く。それは

他の川と合流しながらだんだん太くなっていった。

「まあ大体こんなものかな。河の反対側に湿地があったりするんだが説明するの面倒だからいいや」

「適当だなおい……」

その言葉に、説明に聞き入っていた渡は思わず突っ込む。  
シルビアは渡の言葉にムツときたらしく、

「こっちは無知なお前にわざわざ子どもでも知っているような知識を教えてやっているんだ。ありがたく思え」

と、口を尖らせた。

「はいはい、ありがとうございますお嬢様」

「お嬢様じゃなくて姫様だ、私は」

（そこに突っ込むのかよ！）

渡はまた突っ込んでしまいそうになったが、さらに話を大きくしても面倒なのでぐつと心の中に押さえ込んだ。

少しの硬直の後に渡は息を整えてから言った。

「俺が悪かったから差年三点。それで、続きは？」

シルビアも一度咳き込んでから気を取り直して続ける。

「ええと、この大陸をちょうど真ん中から三等分したうちの左上が

私達のいるアルスファイア連合王国。十数の国が集まって出来ている。下が同盟国であるカラスト連邦。んで右上が問題になっているエルギス帝国」

「ちょっと待った。三つだけって寂しすぎないか？」

「いや、アルザ山脈の北の延長線上に島があつてな、イザナギ皇国という」

「それを合わせたって4つじゃんか……」

シルビアの言葉に少なからず肩を落とす渡。

異世界に来たからにはもつとすごいものを期待していたのだ。しかし聞いてみたら元の世界よりもあっけなかった。

「まあ世の中そんなもんだ。それで帝国のことだが……おい、エリス」

シルビアが本題に入ろうとしてエリスに顔を向けると、机に突っ伏したまま規則正しく寝息を立てるエリスがいた。

流石に今までの話は退屈だったらしい。

シルビアは無言でエリスの背後に回り、

「起きろ」

ばこん、とエリスの頭を叩いた。

「ふにゅっ？」

突然のことに驚きつつも顔を上げるエリス。



状況が掴めていないようで、きよろきよろと周りを見ながらぼつりと呟いた。

「……食後のデザートを」

「ばかやろう」

シルビアは反射的に再びエリスの頭を叩く。  
その一撃でエリスは完全に覚醒し、背筋を伸ばした。

「あつ、はい。ごめんなさい……」

「うむ、分かればよろしい」

エリスはしゅん、としつつも謝り、シルビアはそれに頷いた。  
シルビアは黒板に回り、再度説明を開始する。

「んで、この帝国が我が国に攻め入ってきたんだ」

「そう、それですよ。なんでですか？」

エリスが率直に聞くが、シルビアはうーん、と腕を組んで黙り込む。  
む。

数秒間悩んでからシルビアは口を開いた。

「それがな、全く分からないんだ。別に仲がそこまで良かったわけではないが戦争をふっかけるほど悪かった訳でもないし。それに奴らにメリットがない」

「ですよ。二国を同時に相手するなんて。何か裏があるんでしょ

うか」

渡はエリスの言葉に眉に皺をよせた。

「ちょっと待って。二国同時につてどゆこと？その何とか帝国はもうどこかと戦争してるのか？」

その問いにはシルビアが答えた。

また黒板を指しつつ、

「ああ、帝国は我が国の同盟国であるカラスト連邦と戦争状態にある」

「じゃあこの王国と帝国は戦争してなかったのか？ 同盟国が戦争してる相手なのには？」

「我が国はカラストを支援してはいたがエルギスとは戦争はしてらん。それなりに危ない状態ではあったがな」

「だったらなんで……」

「それが分かったら苦労せん」

シルビアはそこまで言うと、ため息をつきながら椅子に座った。目を瞑って腕を組み、黙り込んでしまう。

会議室はシーンと静まり返り、渡は小さな声でエリスに呟く。

「でもやっぱり戦争をふっかけるって事は何か理由があるんだよな」

エリスもその声に小さく答える。

「だと思えますよ。さっきも言いましたがエルギスとカラストは戦争をしています。昔から、という訳ではありませんが十年くらいは戦争をしていますから、物資的にも危うい状態だと思いますが」

エリスも困惑しているようで、中々考えが纏まらない。

そしてエリスも視線を机に落として考え込んでしまった。

ぼっーん、と一人残された渡。

二人に習って机をじつと見てみたが、恐らく一つの木を切り出したのだろうと予想される大きな円卓にはきれいな木目があるだけだった。

居所が悪そうに周りをきよろしていたが、シルビアが思い出しように言った。

「ああ、そういえば二人に任務があった」

その言葉に渡とエリスは顔を上げてシルビアを見る。

「一人仲間がエルギスの牢屋に捕まっていたな。二人に連れ戻してきて欲しいのだ」

二人はその言葉に揃って首をかしげる。

「名前はロベルツ・ヴァリアック。軍師だ」

エリスはシルビアの言葉を聞いて顔をほころばせる。

「えっと……ロベルツ叔父さんですか……？」

「ああ、そのロベルツだ。エルギスを旅行中に捕まったらしてな。」

まあエルギスには素性は知られていないだろうし、ただの旅行中の親父を捕まえたって感じだろう」

「その人はいったい何をやらかして捕まっただ？」

「食い逃げだ」

「食い逃げ！？」

「旅行中に金が尽きたらしくてな。どうしようもなくなつて捕まったらしい。本人曰く、牢屋ならば衣食住に困らないからわざと捕まったのだー、とか何とか言っていたけどな」

シルビアはそこまで言うともまた深くため息をついた。

「まあいざとなれば使える奴だ。ちょいと行って脱獄させてこい」

「んな無茶いうなよ！」

「大丈夫だ。あいつも味方がいれば脱獄なんて簡単にやってのける奴だ。いけ好かない奴だが実力があるのも事実だしな。放っておきたいが無視できない状況になりつつある。時間をかけてもいいからなんとかしてでも連れて来い」

シルビアはさらにさらにため息をついてポツリと呟いた。

「我々もあいつに力を借りなければいけないほど無力なものなのか

……」

渡は状況は掴めないがその軍師の実力と性格は掴んだ。

そして直感する。

絶対に面倒くさい。

しかし戦いになってもまだまだ役に立てないであろう。

そんな自分が一番役に立つためにはこの任務を成功させるしかない。

渡はそう決意した。

「ちょっと待ってください。叔父さんとはどうやって連絡をとったんですか？」

エリスが心配そうにシルビアに尋ねる。

「ああ、あいつから屋敷宛にな、魔道具を使って連絡してきたんだ。あいつが作った、地中の魔力線を使って一方的に文章だの音声だの映像だのを送る装置らしくてな。優れたものだったがそれっきり音沙汰無しだ。とりあげられたんじゃないか？」

「のんきだなあおい……」

しかし問題はその装置ではなくロベルツ本人である。

「で、その軍師さんはどこにいるんだ？」

「ああ、エルギス帝国の北東の街、レグスだ。地図をやるからそれで調べろ」

「どうやって行くんだ？」

「そのまま歩いていたら捕まるに決まっているからな、船で行ってもらう。しかもそのままじゃなくイザナギ皇国を間に挟んで、だ」

「なんでそんなに面倒くさい方法で行くんだよ？」

渡は率直に聞いたが、シルビアはあきれて首を横に振った。

「そのまま我が国の船で行ったらばれるに決まっているだろう。それにあちらの街まで行くには距離がありすぎて食料やら何やらが尽きるかもしれん。念のためってやつだ」

「でも何で私達なんですか？他の人じゃあ……」

「あいつがエリスがちょっと必要だ、と言っていたのでな。なんかあるんじゃないか？ワタルについては一人でいても邪魔だから世界を見て勉強して来いって感じだ」

「そんな露骨に言わなくたっていいだろ……」

シルビアはそんな渡に目もくれず、さらに付け足した。

「ああ、それとお前らはイザナギ皇国への貨物船に便乗して向かい、そこからまた船でエルギスの港町であるレントに行くことになる。船酔いに気をつけていけ」

渡は精神的な傷に耐えつつもしっかりと頷き、エリスも了解した。

「よし、出発は早い方がいいからな。明日明朝。こちらの準備は出来ているからお前らも支度をして来い。これにて解散」

「ありがとうございました」

エリスはぴよこんと頭を下げ、渡も椅子から立ち上がり会議室から出ようとする。

しかしシルビアから声がかかった。

「あ、エリスにちよつと言うことがあった。渡は先に行っていてくれ」

渡はその言葉を聞いて一人で会議室の扉を開ける。

会議室の外はまだ明るかったが、さっきよりも日が傾き、心なしか空も茜色に染まりつつある。

そんな廊下を歩きつつ、渡は少しだけ見知らぬ場所へ、旅行気分で胸を膨らませるのだった。

~~~~~

「さて、エリス。私が何故お前とワタルにこの任務を命じたかわかるか？」

二人きりになった会議室。

シルビアは頬に手を付いてぼそっと切り出した。

「えっと……さっき言ってたじゃないですか」

シルビアはエリスの言葉に心の底からため息を付き、エリスの鈍感を嘆いた。

だがシルビアはそんなエリスが好きだし、応援してやりたいと思っっている。

「お前、ワタルのことが好きだろう」

エリスは突然のことに驚き、むせる。  
そして真っ赤な顔で反論した。

「んなつ、そっそんな訳無いじゃないですか！」

「だって、屋敷中で噂してるぞ。エリスはワタルに恋をしているとか、付き合っているとか、もうやってしまったとかやってしまったとかやってしまったとか」

「そんなことはありません！ 何ですかやってしまったって！！」

「私が言っているわけではないぞ。屋敷の奴らが言っているだけだ」

「黙らせてきます！！」

がたつと椅子を立ち、会議室を出ようとするエリス。

普段はおとなしいエリスだが、今は照れとも怒りとも焦りとも似つかない表情である。

しかしシルビアはそんなエリスの心情を読み取っているかのように落ち着いて話しかけた。

「まあまあ、エリス。だが、お前がワタルが好きなのは事実だろう」



？」

エリスはその言葉に敏感に反応したが椅子にすくとんと座ると、小さく頷いた。

シルビアは満足そうに頷くと、身を乗り出して秘密の話をするかのように小さな声で話しかけた。

「だからな、私はお前達を応援してやろうと思ったのだ」

「お、応援……ですか？」

「そうだ。ちなみに今回お前達はエルギスのレグスまで言ってくるわけだが、結構な長旅になるだろう。そこでだ、お前はその間にワタルを……」

「きゃーー!!」

エリスは脳の許容範囲を超えたらしく机にゴン、と頭をぶつけた。そして耳を押さえてぶつぶつと何やら呟きはじめる。端から見たら不気味に思うような光景である。

そんなエリスにシルビアはまた落ち着いて話しかける。

「まだ最後まで言っていないぞ。……だが言いたいことは分かるだろう。帰りだってロベルツは空気の読める奴だから気を遣ってくれるはずだ。心配事は何もない！ さあいけエリス！ お前の明日がかっているんだぞ!!」

シルビアも訳の分からないことを宣言し、まだ耳を塞いでいるが黙りこんだエリスを指差した。

「エリス！ お前がそんなでどうする！ お前も中々鈍感だが奴の方がもっと鈍感だ。お前がアプローチしてやらねばお前達の明るい未来は開かれんぞ！」

エリスはその言葉を聞いて、静止する。

シルビアもエリスを指差したまま止まり、会議室の空気が止まった。

そのまま数秒してから動いたのはエリスだった。

ゆっくりと立ち上がり、落ち着いてシルビアを見る。

そしてエリスも宣言した。

「私……やります」

シルビアは静かな、だが熱いエリスの心を確認し、満足そうに頷く。

そして笑顔を見せてエリスに言った。

「私に出来るのはここまでだ。後はお前次第。頑張れよ」

「はいっ」

今ここに少女の静かな誓いが刻まれたのだった。

く異変く（後書き）

これを書いていて思いました。

（国とか大陸とかの形想像しにくくね？）

なのでここで簡単に説明していきたいと思います（本当なら文章中だけで分かるような文章を書ければいいのですが・・・）

簡単に言えば

120度（角度）で円を三等分にした感じです。

そして円を茶碗に見立ててください

でもって上の方にニュージーランドとかイギリスみたいなあまり大きくない島があります

想像できましたか？

それでも分かんわボケ！と言う方は感想コーナーに送ってください。

頑張つて次を考えておきます。

次の話は異国に出発するところです！

お楽しみに！

ゝ出発ゝ（前書き）

長くなったので二つに分けました  
本日中にもう一つは投稿するつもりです

く 出発く

「仕度は出来ましたか？」

「うーん、もうちょっとかな……」

「早く出発しないと港の貨物便に間に合いませんよ」

「分かってるよ母さん……」

「だっ誰が母さんですか！」

くくくくく

翌朝。

太陽が昇るか昇らないか、というほど朝早く、普段着だけでは流石に肌寒い。

渡、エリス、シルビアの三人は屋敷の門の前で馬車を待っていた。昨日の街に出た門とは逆の方向である。

既に渡とエリスは旅の為の仕度を済ませており、二人の隣には革をなめして作った大きな鞆が置かれていた。

「さて、そろそろ来ると思うが……準備はいいか？」

口を開いたのはシルビア。彼女はニコニコと二人を見ているが、その笑顔が渡には違和感が感じられた。

「なあシルビア。なんでそんなににやにやしてるんだ？」

「にやにやだと？ そんな気持ち悪い笑顔ではない。私は二人の無事を願ってだな……」

と、腰に手を当ててシルビアは露骨にため息をついた。  
しかし渡にとってもエリスにとっても見送ってもらう、というのは悪い気はしない。

しかしエリスはこの状況に少しだけ違和感を感じていた。

「あの、四番隊の皆はなんで来ないんですか？」

それはもつともな質問だろう。

エリスは幼くて小さいが、こんなでも一応隊長である。彼女を見送るというのは誰が考えても当たり前だろう。

別にエリスは自惚れているつもりはないが、少し気に掛かったのだ。

それは渡も薄々感じてはいた。

あの、エリスを愛するあの人が来ない筈がない、と。

その問いにはシルビアがあっさりと答えた。

「ああ、だって言っていないからな」

その答えに二人は啞然とした。

「だって、あいつ等に言ったら面倒になりそうだったからな。いっても若干一名くらいだが」

その言葉を聞いて渡はシルビアに深々と頭を下げた。命を落とすくらいなら頭を下げた方が全然ましだ。

しかしエリスは困った顔をしながらポツリと言った。

「せめてペルには何か言っておかなきゃ……。あの子、ああ見えて結構寂しがりやなので」

「やめておけ。死人が出るぞ」「ごめん。俺死にたくない」

シルビアと渡の言葉が見事に重なり、エリスをやんわりと否定する。

それを聞いてエリスはそれなりに傷を負ったようだったが、負けじと反論する。

「で、でもそれくらいであの子が怒るわけありませんよ!」

「お、もう馬車来たんじゃないか? ほら、あれ」

シルビアはエリスの言葉を完全にスルーし、無理矢理話題を変える。

エリスはさらに何かを言おうとしていたが、すぐに諦めて軽くため息をついた。

渡はエリスに対して申し訳なさそうにジェスチャーで謝っていた。

シルビアが指を指した先には、道をぱかぱかと音を立てながらやってくる馬車が遠くに見えた。

馬車といっても馬が引いている荷台に幌がついただけのもので、遠くから見ても分かるほど老いた老人が御車台に乗っている。しかも荷台には樽や木箱が満載で、馬も大変そうだ。

見たところ荷台には二人が乗るスペースは無いようだ。

「あの、姫。私たちはあれのどこに乗るんですか？」

エリスが恐る恐るたずねると、シルビアは当然のように言った。

「お前らが馬車に乗るわけないだろう。アレの手伝いをしながら港まで行ってくれ」

シルビアの予想外の答えに驚く渡とエリス。

三人の間をひゅうと風が流れ、シルビアとエリスの髪が乱れる。

シルビアは自分の髪を右手で抑えつつ口を開く。

「私は馬車に乗ると言った覚えは全くないぞ」

「紛らわしいんだよ！」

渡はシルビアに間髪いれず突っ込み、三人の時はようやく動き出した。

シルビアはやれやれ、とまたため息をつく。

しかしエリスはあくまで冷静に聞いた。

「でも、あれを手伝うってどこを手伝えればいいんですか？」



「いや、あの馬車じゃなくてあの老人を手伝ってやれってことだ。  
……おい！」

シルビアはそう言って指をパチン、と鳴らす。

するとどこからともなく二人のメイドが馬車よりも一回り小さな荷車を引いてやってきた。

突然やってきたメイドたちに渡とエリスは目を丸くしていたが、メイドたちはお構いなしのようだ。

荷車には馬車に載っていたような木箱やら何やらが沢山積んであった。その荷車を、重量を感じさせないような動作でシルビアの後ろに止める。

メイドたちは役目を終わると一礼してから音も無く立ち去ってしまった。

突然の出来事に対処しきれない渡とエリスだったが、渡が何とか声を出す。

「えと……これを……？」

「運んでくれ。港までな」

その言葉に驚いたのはエリス。若干顔が引きつっている。  
エリスだけでなく渡も顔に驚愕の色を浮かべている。

「港までつて、一体どれくらい歩けばいいんですか……？」

「んー、まあ急げば昼を過ぎたあたりには着くんじゃないか？」

「十分長いよ！」

再びシルビアにつっこむ渡。

しかしどう反論しても敵わないと見て、渡とエリスは反論を止める。

そうこうしている間に馬車に乗った老人はすぐそこまで近づいていた。

ここまで来ると老人の輪郭がはっきりと見えてくる。

農民風の服に立派なひげをたくわえた顔、老いながらもしゃんと背筋を伸ばして座っているところを見るとまだまだ衰えてはいないことが分かる。

太い指で手綱を握り、しょぼしょぼとした目でしっかりと前を見据えている。

その老人は三人に気が付くと手を挙げて挨拶してくる。

シルビアは手を挙げて返したが、渡とエリスは無意識に頭を下げてしまう。

それからシルビアは歩いて馬車に近づき、老人と何やら話しかける。

すると老人は馬車から降りて恭しくひやうめいしくシルビアに一礼する。

渡とエリスはシルビアに続いて近づき、老人に挨拶する。

「「おはようございます」「」

老人は二人に気が付き、同じように挨拶をした。

「ああ、お早う。えーと……」

「俺は柳瀬渡といいます。渡のほうが名前です」

渡は緊張しながらも老人に自己紹介。

「ほほう、君が例の……。そちらはエリスちゃんだったかな？」

「あ、はい。エリス・フィンカートといいます。……すみませんが、どこかでお会いしたことがありましたか……？」

「ああ、そうだったな。君がまだもつと小さい時だったから、覚えてないだろうな。娘が立ったと君の父上が大騒ぎしてね、呼び出された時に初めて君を見たんだ。なるほど、君の母上に良く似ている」

老人は顎をさすりながら目を細めて昔話を始める。

渡とエリスはその様子に戸惑いながらも老人の言うことに頷くしかない。

それに見かねたシルビアが二人に助け舟を出した。

「おい、自己紹介もまだなのに昔話を始めるな。二人が困っているだろう」

老人はシルビアに言われて恥ずかしそうに頭をかいた。

それから改まったように真面目な顔になって話す。

「おおっと、これは大変失礼した。私の名はマホック・ヴェルゲイン。見ての通り今は街と港を行ったりきたりしている」

それを聞いたエリスは目を丸くして老人、マホックを見た。しかし渡には何のことなのか全く分からない。

エリスはそのままマホックを指差したまま口をパクパクとさせて

いたが、シルビアがエリスの代弁をするかのように再び口を開いた。

「私のおじいさま、先代国王の右腕として活躍した『元』將軍マホック・ヴェルゲインだよ」

シルビアの一言で渡とエリスは口をあぐりと開け、信じられないような目でマホックを見る。

しかし当のシルビアは本当に面倒くさそうにため息をつき、パンパン、と手を叩いた。

「さて、ここら辺にしておかないとあっちに着く頃には日が暮れてしまう。そろそろ行け」

その言葉に硬直していた二人は、はっと気が付いて会話を中断する。

そして渡とエリスは鞆を持ち直して、荷車に向かった。二人は荷車の上に鞆を置く。渡が荷車の前に立って取っ手を掴んで引こうとする。

が、

「なっなんだこれ！　びくともしないぞ！」

「結構重いからな。まあ行きは平坦な道だから、そんなに苦勞することはないだろう。動き出せばそのままいけるさ」

「その『動き出し』ができねえんだよ！」

「その為に二人いるんだろうが。エリスも手伝ってやれ」

「あ、はい」

エリスも後ろから荷車を押す。しかし二人がかりでも荷車は動かない。

「あれ、おかしいな？ 四番隊の隊長と副隊長はこの程度の奴らだったのか？」

「うっさいわ！お前も手伝いやがれ！」

シルビアはふむ、と顎に手を当てて少しだけ考えたが、何も言わずにエリスの隣に近づいた。

そしてドレスであるにもかかわらず、荷車をガン！と蹴飛ばした。すると、

「うわっ！」「きゃっ……」

荷車は弾かれた様に動き出し、車輪はがらがらと音を立てて回りだした。

渡とエリスは危うく転びそうになったが、何とか足を動かしてそれを回避する。

そして渡は勢いが付いた荷車のスピードを落とさないようにしながら、後ろを向いて叫ぶ。

「このやろっ！ もう少し丁寧にしやがれ！」

「手伝えといったのはお前だろうが！……まあせいぜい頑張って来い」

シルビアはそのまま二人に向かってひらひらと手を振る。それにはエリスが答え、片手でシルビアに手を振り返す。

だんだんと小さくなっていく影を感慨深げにシルビアは見つめながら、ため息を一つついて屋敷に戻ろうと足を動かしかけた時。

「若さとはいいものですなあ」

背後からいきなり声が掛かった。

「うわっ！……なんだマホツクか。お前まだ行つてなかったのか？というより行かないのか？いや、早く逝け」

「ほっほっほ。相変わらず姫は辛口ですな。心配せずとも老い先短いですわい。それよりも……」

マホツクはそこで一旦言葉を切り、馬車に乗りながら言った。

「ルミニは元気しておりますかな？」

シルビアはその言葉に何か思うところがあつたのか、マホツクから視線を逸らして少し考える。

数秒ほどの時が流れ、沈黙の空気が二人を包んだ。それから再びマホツクをしっかりと見てから言った。

「ああ。相変わらず、だ」

「そうですか……。ではルミニによろしく言うておいてはくれませぬか？」

「ふむ。それくらいならまあいいだろう。……それよりも早く行かないと二人とはぐれるぞ」

「ほっほっほ。確かにそうですね。ではよろしくお願いします」

マホツクは馬車の上から頭を下げ、握っている手綱で馬をぴしゃりと叩く。

首を伸ばして道端の草を食べていた馬は面倒くさそうに動き出す。

シルビアはその影も小さくなるほど見てから、一つため息をつき、今度こそ屋敷に帰っていった。

く港町く（前書き）

なんだかやるやる詐欺で訴えられそうですね

今日中にとっておきながらできてないし、また話が長くなって分けるし・・・



く港町く

「マホックさん遅いですね」

「シルビアと話してたから、何か言うことでもあったんじゃないか？」

一方渡とエリスは順調に港町を目指していた。  
が、マホックがいつまで経っても来ないので心配していたのである。

そのため二人は、少しだけ歩くスピードを落として荷車を引いていた。

ちらちらと、エリスは後ろをみながら渡に言う。

「それにしても遅いですよ。何かあったんじゃないですか？」

「うーん、でもこれを一回止めたらもう動かせないしなあ」

渡とエリスはあれやこれやと言いながらゆっくりと道を進んでいく。

これまでの道はシルビアが言ったように平坦で、のぼりも下りも無く歩きやすかった。

しかし両脇は背の高い木が乱立し、これだけまっすぐな道を進んでいると、なんだか気がおかしくなりそうだ。ちなみにまだ分かれ道を一回しか曲がっておらず、それ以外はずっと直線の道だ。

二人は頑張つて荷車を押しながらも、何もないまっすぐな道という苦行に耐え、さらに後ろも気をつけるといふ何とも神経を使う作

業をかれこれ一時間ほど続けていた。

がらがら、という音をずっと聞き続け、永遠とも思われる道をただ歩く。

同じことをただただ繰り返すというのは人にとっては十分拷問と言えるだろう。

二人の会話は自然と減り、その沈黙がさらに疲労を呼び、疲労で会話が減る。

このサイクルが十回ほど二人の中を回った時、ついに変化が訪れた。

「おい、二人ともー」

二人は待ち望んでいたように後ろを振り向くと、遠くにマホックの馬車の姿が見えた。

しかし二人の目はすぐに驚愕に丸くなる。

マホックが近づいている。

それも、

猛スピードで近づいてくる。

明らかに馬では出せないようなスピードだ。というか馬は足を動かしていない。

まるで滑るように猛スピードで近づく馬車は、二人にとって信じられないもの、としか目に映らなかった。

二人は危うく足を止めそうになり、しかし我に返ってなんとか足を動かす。

そうこうしている内にマホックの馬車は音も無く二人の荷車の隣に付き、スピードをあわせる。

遅れてやってきた風が三人の間を通り、木々を揺らしながら抜けていった。

マホツクの馬は足を動かさだし、馬車の車輪もがたごとと回りだした。

その様子に二人は、ただ足を動かし、目を丸くして隣の馬車を見るしかない。

「魔法だよ。結構疲れるがね」

二人の様子を見てか、マホツクが二人に説明した。しかし二人にその言葉が届いたかどうかは良く分からない。

マホツクはそれに構わず続けた。

「ちょっと用を足していくのでな。二人は優しいから私のことを待っていると思ったから、知らせてからにしようと思ったんだ。私は遅れるから先に行つてくれ」

渡とエリスはその言葉にただ頷くと、前を見てスピードを上げて歩き出した。

終始口を開かなかった二人に、マホツクは微笑み、馬車を止める。それから木の陰に向かつて、陰から二人の様子を観察する。

「……行こうか」

「……はい」

渡とエリスは肉体的な疲労とは別の疲労を顔に浮かべ、一路港を目指すのだった。

それを遠くから見ていたマホツクは、用を足すこと無く無表情で馬車に近づく。

それから渡達が曲がり角を曲がり、完全に見えなくなるまで二人の荷車を見つめ続けた。

二人の姿が完全に見えなくなると、馬車の車輪の脇にしゃがんで、

「君、何してるんだい？」

ポツリと呟いた。

すると、馬車の下から金髪の少女がぼとつと落ちて、そのまま土下座の格好になる。

その少女は金髪を団子のように結んでおり、馬車の下に隠れていたため泥だらけになってしまっている。

その少女は……

「將軍の馬車に張り付いていた非礼、誠に申し訳ありません！ 斬られる覚悟は出来ております！」

ペルだった。

彼女は馬車が屋敷に着いてからずっと、馬車の下に潜んでいたのだ。

「まあ待ちなさい……。まず君の名前を教えてくださいおうか」

「はい！四番隊所属、ペル・アルマティアでございます！」

「ふむ、四番隊の……。それにアルマティア家といえばそれなりに名門じゃないか。何でこんなことしたんだい？」

するとペルは一瞬置いてから言った。

「一言……。エリス様に一言……。別れを」

「別れだなんて・・・、任務は良く知らないが終わったら帰ってくるだろう。そんな一生の別れみたいな言い方をしなくてもいいんじゃないかい？」

「いえ、別れであります！再会しても、今度会うときにエリス様の心には私はいないかもしれません」

マホツクはその言葉に何か思うところがあったのだろう。途中から言い終わった後には泣き崩れてしまった少女の肩にぼん、と手をのせていった。

「ならば一緒に来るかい？ そんなに言うのだったらチャンスあげよう」

ペルは信じられないような目でマホツクを見た。無理もないだろう。元將軍の馬車に忍び込んだ時点で見つかった時の死は覚悟していたのだから。

ペルは上げていた頭を再び地面につけて、涙ながらに目の前の老人に深い感謝を表すのだった。

~~~~~

「やっと着いた」

暫らくして、渡とエリスは潮の香りがする港町に着いたのだった。時刻は昼を過ぎた頃。季節が夏ではないため太陽が真上にくることはないが、ほんのすこしだけ日が傾いているのが分かる。

あたりにはカモメやらうみねこやら、多くの水鳥が飛び交い、メロディを作っている。

渡達がいる街の入り口は高台になっているらしく、眼下には大小さまざまな船が大きな海原への出港を待っているかのように停められていた。

渡とエリスの二人は少しだけ下り坂になっているところに荷車を止めると、潮の香りをいっぱいに吸って水平線に目を細くして見つめる。

少しの曲線を描いた水平線に对岸は見えないが、この先にこれから行くであろう異国の地が待っているのだろう。

そう思うとこれまでの疲れを忘れて気持ちがわくわくしてくる。

二人は無言で密かに心躍らせていたが、いつまでもこうしている訳にはいかない。

「いこうか」

「はい」

二人は足を動かした。

しかし、問題はすぐにやってきた。

この港町には急勾配が多すぎるのだ。

動かすのが難しいほど重い荷車は、支えるのも難しい。それも、傾斜が急になるほど大変なのだ。

そのため、二人は足をつっぱって、ずりずりと移動することになった。これでは移動ではなく、ただ引きずられているだけだ。

「こっこれ、やっぱり重過ぎるだろ！」

そう言ったのは渡。背中をぴったりと荷車につけて踏ん張っているが、中々難しいようだ。

「でっでも、この下にこの荷物置かなきゃですよ……」

エリスも後ろから荷車を掴んで支えているが、力が足りない。

その様子を周りの人は微笑みと共に温かい目で見ていた。

この時間帯に街を歩いているのは主婦の方々と、周りにいる人の七割くらいはつぎはぎが目立つドレスにバスケットを持った女性ばかりだった。中には子連れの女性もいて、「あれなにー？」「しっ、指差しちゃいけません！」等というお約束も忘れない人もいた。

とにかく老若男女も全ての人が二人の様子を見ていた。

渡とエリスは周りの人から笑いながら見られる、という状況をと  
ても恥ずかしく思っていたが、この状況をよい方向に打破する策は  
頭から浮かんでは来なかった。

疲労の次は笑い者、という苦行に二人は耐えつつも、じりじりと  
少しずつ進むしかない。

しかしだんだん顔を真っ赤にして俯きながら進む二人の目の前に、  
転機が訪れた。

悪い方の。

二人の脇の路地から数人の子どもが勢い良く飛び出したのだ。  
その子ども達は荷車の前を通ってまた別の路地に飛び込んでいく。

渡は突然目の前に現れた子どもに驚き、バランスを崩してしまっ  
た。

そのままガタン、と動き出した荷車を二人が止められるはずも無  
くそのまま荷車は転がる。

渡とエリスもそれに巻き込まれ、渡は前、エリスは後ろから荷車  
にくっついて猛スピードで坂を駆け下りた。

「うわあああああ!」「きゃあああああ!」

二人が揃って悲鳴をあげ、当たったら即死は免れないようなスピ  
ードを出しても周りの人間達は動じない。

それどころか落ち着いて道の真ん中を空ける。そして一人の女性  
が叫んだ。

「ペツソさーん! 出番ですよー!」

だんだん周りの風景がゆっくり見えてきて、本気で死を覚悟し始



めた二人がゆく道の先には、一人の男性が立っていた。

線は細く、背も高い。耳は長く、肌は黒い。

その男性は木箱やらなにやらの整理をしていたが、女性の呼びかけを聞くとゆっくりと後ろを向いた。

そして動じる様子も無く何かぶつぶつと呟き始める。

「そこの人早くどいてー！」

猛スピードで駆け下りる二人にはペッソと呼ばれた男性と、その先の荷物と、さらに聳え立つように止められている大きな船しか見えていない。

あまりのスピードに涙が出てくる目を気にすることも出来ず、ただ死ぬとしか思っていなかった渡は、やけくそ気味になってスピードを上げた。

今まで後ろ屈みになって回るように動かしていた足を、ただ前に動かすために動かす。

エリスは荷物を括っていた紐につかまる様にしていたため、自然と前かがみになってしまう。

その様子を見てか、目の前のペッソは細い目と眉をぴくりと動かし、少しだけ笑ったが呟きは止めない。

いよいよ二人とペッソの間が20メートルくらいになった時、ペッソは両手を前に突き出した。

すると、ブンと丸い紋章のようなものが手の前に現れる。

そのまま目を細めてタイミングを計る。

駆け下りる二人は目を瞑ってただただ足を動かすだけだった。

そして、ペッソの紋章と荷車が触れた時。

ぴたっ、と荷車が動きを止めた。完全に静止したのだ。  
一瞬の出来事に誰も反応することが出来なかったが、ペッソだけはこれに反応していた。

「せいっ！」

そのままペッソは背負い投げのように何かを投げる。  
すると、

渡とエリスは宙を舞った。

しかもこれまでつけてきたスピードの何倍もの勢いで。

まるで砲弾のように、仰角をつけて飛ばされた二人は、宙を舞っているということを認識できなかった。

（ああ、俺って死んだのか……。これから天国に行くんだな……）

死んだとしか認識していなかった。

それはエリスも同じで、硬く目を瞑って丸くなって空を舞う。

最初に違和感を感じたのはエリスだった。

浮遊していることに気が付いたのだろう。恐る恐る目を開けると、

きらきらと輝く水面と大きな大きな船の甲板が見えた。

あまりの絶景にエリスは暫らく目を見開いて啞然としていたが、次に目に入ってきた帆船のマストを見て事態を把握した。

「わっワタルさん！ 起きて下さい！」

「ああ、見える……。俺は今天国への階段を上っているんだ……」

「バカなことを言っていないで早く起きてくださいよ！」

エリスに言われて、渡はふつと目を開けた。

渡も、エリスと同様に目を見開いて驚いていたが、やっぱりマストをみて理解したらしい。

口をパクパクさせてから咳き込むように言った。

「ちよつ、空飛んでるじゃん！」

「いや、それよりも……」

エリスは手足をばたばたと動かしながら叫ぶ。

「私たち、落ちますよおおおお！」

大きな放物線を描いて飛んでいた二人だったが、重力がある限り落ちるのが当たり前というもの。そして二人はその『当たり前』から外れることなく進行方向を下へ下へと向けていった。

このまま行けば海に落ちる、という二人の考えは当たっており、二人揃ってこのままいけば二人の身体は海面に叩きつけられるだろう。

そう、このままいけば。

二人はばたばたと暴れながらさらに下へと落ちていたが、突然強い衝撃が二人を襲い、二人の身体は一瞬だけ完全に静止した。

（ぐあっ……？）

揺らぐ視界の中で必死に思考を巡らせたが、同時に脳も揺れていたためうまく考えが纏まらない。

さっきまでは手足を振り回していたが、今は身体から力が抜けてだらりとしたまま二人は落下した。

かなりの高さをまつさかさまに落ちた二人は、今度はふわつという柔らかい感触に支えられて完全に静止する。

今度はは落下も上昇もなく、二人はふわふわとした何かの上に寝転がった。

ぐらぐらとした視界の中で何とか立ち上がろうとするが、足場が不安定なのと、身体もふらふらしているためすぐに転んでしまう。まるで遊園地の激しく回ったジェットコースターから降りた後のようだ。

立つことを諦めた渡はふわふわの何かの上に寝転がった。  
ぐるぐる回る視界には太く聳え立つマストと、何やら仕掛けの上にネットのような物が張ってあるように見えた

（ああ、あれにぶつかって落ちたのか……）

と、無気力に認識する渡の周りにはクー、クーというカモメの鳴き声と、大きな笑い声が聞こえてきた。

どうにか回復してきた目で起き上がってみると、自分達はさっき見た大きな船の上にいること、自分達の下にあるものがクッションであること、そして近づいてくる男を認識した。他にも忙しそうに働きながらも笑い声を上げている屈強な男達もいた。

その男は笑顔で近づいてきたが、渡をスルーしてエリスの元に向かう。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

白い歯をキラリと見せながらエリスに手を差し伸べる男。その男も筋肉ムキムキでいかにも船乗り、という感じだ。

「あ、ありがとうございます……」

男はにこつと笑うと、エリスの手を取ってそのまま立ち去ろうとする。エリスはまだぼんやりしているようで、男にされるがままだ。その様子に渡は若干ムツとしつつ、男を呼び止めた。

「おい！ 俺を忘れてるぞ」

すると男は面倒くさそうに、そして心底嫌そうな顔をして振り返った。

そして何も言わずに空いている左手を差し出す。

渡がその手を掴むと男は強引に手を引き、渡を立たせるとぱっと手を離す。

「さ、お嬢さん。とても驚かれたでしょう。こちらでお茶でも……」

「おい！」

男はすぐにエリスを船内に案内しようとする。エリスも若干困惑しているようで、ちらちらと渡を見てくる。

渡も強引な男に向かって睨み付ける。

男は深くため息をついて肩をすくめ、けだるそうに再び渡を見た。

「なんだい少年。もう君は立っていられるだろう。その足でどこぞ

へいきたまえ。そして私の邪魔をするな」

「邪魔をしているのはお前の方だろ。そいつは俺の連れだ」

「なんと！ 君のような奴隷がこの美しいお嬢さんの連れだなんて……。そんないい加減な嘘をつくのはやめたまえ」

「嘘じゃねえよ！ ついでに言う俺は奴隷なんかじゃない。人だけどな！」

「空を飛んでまだ夢を見ているのかい？ いい加減夢から覚めたまえ。そして早く巢に帰りなさい」

「夢も見てねえよ！ しかも何だよ巢って！ ふざけんな！」

お互いに睨みをきかせてばちと火花を立てる二人。エリスはその様子を身を引いて観察し、仲裁に入るタイミングを計っていた。すると、エリスの視界の外から二人に向かって歩いてくる人影があった。

さつきはよく見ていなかったが、たぶん渡とエリスを投げ飛ばしたペッソという青年だろう。

その青年は二人に近づくと、男の方を思い切り殴り飛ばした。

突然の出来事にびっくりする渡とエリス。

殴り飛ばされた男は甲板の上を数メートルほど転がった。

そして殴られた頬をさすりながら叫んだ。

「殴ったね！」

どこかで聞いたことがある、と渡は思いながら殴り飛ばした青年

を見た。

改めてみても線が細く、背もすらつとしていて中々のイケメンだ。

渡が気が付いて、慌てて青年にお礼を言おうとしたその時、青年は渡には目もくれずにまだ転がっている男に近づく。

そして男の腹にもう二、三発蹴りを入れる。

「や、やりすぎじゃないですか……？」

慌てて青年を止めようとした渡は、二人に恐る恐る近づく。すると青年は無表情に振り向き、渡にずっと顔を寄せる。驚いて顔を引く渡に青年はいまいましたに言った。

「こいつは俺が投げた女の客を片っ端から口説いていくんだ。なんかむかつく」

「それだけですか！」

「ああ。別に俺が口説きたい訳ではないが、俺がこいつが女を口説くことを助けてるみたいで、虫唾が走る。こいつのせいで若い客もあんまり来なくなっただけだな」

きつぱりと言い放った青年に渡は苦笑しつつ、さっき言えなかったお礼を言う。

「あ、さっきはありがとうございました。……えっと、ペッソさん、でしたっけ」

「ほう、さっきの状況で周りの声が聞こえていたのか。中々度胸のあるやつだ。だが、さっきやったことが俺の仕事みたいなもんだか

ら、別に礼を言われる事はしていない」

それを聞いた渡は素直に思った。

（この人、クールでかつこいい！）

礼を言われても舞い上がることもない冷静さと謙虚さ、そしてあくまで全て無表情でやってのけるクールさ、そしてこの容姿。なるほど、さっきのペッソを呼ぶ声が若干黄色い感じだったのはこれだからか、と渡は勝手に納得した。

そして渡は比べる。さっきの気持ち悪い男と……。

渡がひよい、とペッソの後ろを見てみると、既に立ち上がってどこから取り出したのか分からない櫛で乱れた金髪を整える男がいた。その後切れた口から出た血をハンカチで拭い、汚れた服の埃をぱんぱんと払ってから隅で縮こまっているエリスに向かってウインクをして見せた。しっかりと白い歯も見せている。

その様子を見て渡は呆れを通り越して感心していた。ここまで我を通す人間はそうそういない。恐らく悪い人間ではないのだろう。

（まあ好きにはなれないけどな）

心の中でポツリと呟いた。

そのとき、ペッソがごほん、と咳払いをして雰囲気を整える。全てが終わった男もペッソの脇を通り過ぎてエリスの元に向かうとするが、ペッソに脇腹をどついて止める。

渡はすっかりおびえて隅に縮こまっているエリスを呼び寄せ、よ



うやく四人が揃った。

「これは失礼しました、おじよ」「黙れ」

すかさず口説きモードに入ろうとした男を、ペッソがこれまたすかさず裏拳で止める。

顔にクリーンヒットしてのけぞる男に、ペッソはさらに追撃。腹を殴り、足を払うと男は完全にバランスを崩して転倒した。

「ぐはっ！」

床で苦しそうに悶える男を片足で踏みつつ、ペッソは頭を下げる。

「うちの船員が失礼しました。こいつも悪気があるわけではないので許してやってはくれませんか？」

「そうなのです！ 私は私の信条に則って……」

「お前は黙っている」

ペッソは男の顔を踏んで何も言えないようにする。

「あはははは……」

エリスも苦笑しながら二人の様子を見ており、やはり若干引いているようだ。

渡もエリスも顔が引きつっているのを見て、ペッソは男を踏んでいる足をどけた。

男はがばっと起き上がり、また乱れた髪を整える。それから口を拭って服の埃を払って、

「キラッ」

再びウィンク。さっきのパターンと全く同じだ。

その様子に、ペッソはまた手が出そうになるが、渡達が引いているのを見たためか自重する。その代わりに大きくため息をついた。そしてペッソは男の頭に手を添え、

「すみませんでした」

悪戯をした子どもを無理矢理謝らせる親のように、男の頭を無理矢理下げさせた。

男は反抗しようとしたがペッソに攻撃されるのを恐れたのだろう、おとなしく頭を下げた。

「そっそんな、いいですよ別に……」

「そうですよ。俺たちだってペッソさんに助けられたわけですし・・」

エリスと渡がそう言うのと、ペッソは男を掴んでいた手を離れた。げほげほ、とむせる男。そして苦しそうに言った。

「なあ、俺もそろそろ自己紹介していいかな。いつまでもただの『男』だと寂しいんだ」

ペッソはその言葉に思い切り不思議そうな顔をしていった。

「お前はたまに何を言っているのか分からなくなるな。いつも普通なら出てこないような言葉を言う。それとも俺が殴りすぎておかし

「くなつたか？」

「ははっ、この俺を心配してくれるのかい？　だが、それは無用だ。男の心配など気持ち悪い以外の感情がでてこない。心配されるならあなたのような美しいおじよ……」

男の話し相手がペッソからエリスに変わる前にペッソは男の顔を、今度は平手で叩いた。

パーン、と気持ちのいい音が響き、男は身体をひねって180度後ろを向かされる。

「二度もぶった！　親父にもぶたれたこと無いのに！」

「黙っていると言ったはずだ！」

ついにペッソの堪忍袋の緒がきれたらしい。きれいな回し蹴りが男の脇腹に直撃し、さっき殴った時よりもさらに数メートル増して吹っ飛んだ。

「ごろごろと転がる男に目もくれず、ペッソは淡々と言う。」

「あいつはゲイゼルといいます」

「ちょっと……それ俺の言葉……」

自己紹介のタイミングを奪われた可哀相な男、ゲイゼルは呻くようにそれだけ言うのと動かなくなった。

数秒、三人の間を沈黙が流れる。それからゲイゼルを本気で心配し始めたエリスと渡を見て、ペッソは頭を掻きながらいった。

「これくらいは日常茶飯事なので、あいつもアレくらいでは死にま

せんよ」

そういつてペツソは動かないゲイゼルの元まで歩き、無表情に脈を測る。一応脈はあるようで、乱暴にゲイゼルを担ぎ上げると、渡たちの元に帰ってきた。その歩みは軽く、重そうなゲイゼルを担いでいても乱れることは無かった。案外分らないだけで、ペツソもそれなりに筋肉がついているのかもしれない。

「大変失礼いたしました。……お詫びといつては何ですが、あなた方を目的地までお送りいたしましたしょう」

ペツソはそのまま一礼するとそう言った。

しかし渡とエリスにとつては動かないゲイゼルのほうが気になる訳で、ペツソとゲイゼルをちらちらと見ている。

そんな二人の様子を見てか、ペツソは困った顔をしながら必死に答える。

「いや、本当にこいつは大丈夫です。だからあなた方はこんな奴のことを気にしなくてもいいのです。さあ、何なりと申し付けください！」

腕を広げて力説するペツソ。

しかしそれを見る二人はもつと別のことを考え始めた。そして、二人揃ってポツリと呟いた。

「客が来なくなる理由、それですよ」

その言葉に、ペツソは不思議そうに首をかしげるのだった。

く港町く（後書き）

本当ならゲイゼルなんてキャラは出る予定じゃなかったんですよ。  
ノリで出してしまいました（汗）  
キャラ独走状態です・・・

そしてまた修正。

いままで出したものも全て修正しました。  
これからはさらにしっかり確認するようにします

く染色く

渡とエリスの強い要望によって、ゲイゼルを医務室へと運んだ三人は再び船の甲板に戻ってきた。

周りには忙しそうに動き回る船員が十数人。さっきまでのやり取りを遠巻きに見ていたようで、今は安心したようにそれぞれの作業に勤しんでいる。

時間もそれなりに経ってしまったようで、日もさらに傾いている。しかしマホックが到着した様子は全くない。

「イザナギ皇国行きの貨物船ですか？」

一段落した渡とエリスは当初の目的を果たすことにした。

イザナギ皇国行きの貨物船を探すこと、である。

「ああ、それでしたらこの船ですよ」

ペッソは渡達に聞かれた問いにあっさりと答えた。

渡達は驚きを隠せなかった。まさかこんなにすぐに見つかるとは思っていなかったのだろう。

「貨物船ってこんなに大きかったですか・・・？」

エリスが恐る恐るペッソに聞く。まだ半信半疑のようだ。

それは渡も同じのようで、エリスの言うことにこくこくと頷いている。

「はい。出発は大体荷物の積み込みが終わり次第。あちらまでは一週間ほど掛かります」

「そうですか……。まさかこんなに早く見つかるとは思って無かったですね」

「だな。こんなに沢山の船があるからもつと時間がかかると思ってたんだけどな」

「運が良かったですね」

にこつと微笑むペツソ。ついつい二人は上目遣いでペツソを見る。

「まだ積み込みが終わりそうに無いので、町で時間を潰していた方がいいと思いますよ」

「確かにここじゃあ暇だよな。それに……」

「さっきの方もいつ起き上がってくるか分かりませんしね……」

三人は苦笑交じりに言葉を交わす。ゲイゼルのことを思い出してしまった。

「じっじゃあ、ちょっと船を降りて見ようかな」

「そっそうですね。ではまたよろしく願いします」

「分かりました。出発の時には鐘を鳴らしますので、鐘が鳴ったら船に戻ってくださいね」

渡とエリスは手を振ってペツソと別れ、船を降りる。その間にも大きな荷物を持った屈強な男達が二人を通り過ぎては船に乗り込んでいく。

ぶつからないように身体を小さくしながら歩き、二人は石畳に足をつけた。

それからきよろきよろと辺りを見回すと、二人が持ってきた荷車はすぐに見つかった。

小走りで駆け寄り、二人の鞆を手に取る。あれだけのスピードで走ってきたのに、中身は無事だ。それもこれもペツソのおかげだろう、と推測する。

心の中で再びペツソに感謝しつつ、エリスは渡に聞いた。

「さて、これからどうしましょうか」

「うーん・・・」

二人はまた辺りを見回してみたが、めばしいものは見つけれなかった。

「まあ、適当にぶらぶらしていれば時間も経つんじゃない？」

「それもそうですね」

という訳で二人はこの港町を散策することにした。

さつきよりも時間が経っているせいか、周りにいる人はバスケットを持った奥様方から様々な荷物を持った男が多くなっていた。

その中には渡達とそう年の変わらないような少年もあり、渡は自



分の世界と異世界との違和感を改めて感じさせられる。

そういった少年達は渡達のことを珍しそうにちらちら見ながら通り過ぎていくが、これはこれでさつきよりも恥ずかしかった。

そんなぎこちない調子で歩いていた二人だったが、唐突にエリスが切り出した。

「イザナギ皇国ってどんな国なんでしょうね？」

「えっ！　いついやあ、どんな国なんだろうね！」

女の子に突然話しかけられても、大して異性に免疫を持っている訳でもない渡が反応できるはずも無くあたふたとするばかりだった。その様子を見て、エリスは可笑しそうに微笑んでから続けた。

「昔聞いた話ですけど、なんだか面白い文化があるそうですよ」

「面白い文化？」

「はい。主食がパンじゃなくて何とかがっている植物の種子だったり、水浴びじゃなくて『温浴』っていつてあったかいお湯につかったり・  
・・」

「・・・なんかそれ日本（にっぽん）に似てない？」

「そうなんですか？　・・・あと、服の文化も違うそうですよ」

「それは見てみないと分からないけど・・・」

「なんだか髪の色も違うらしいですよ。こっちは結構カラフルな感

じですけど、あっちはもつと暗い色だそうです」

「それって日本だね！なんかすごく被ってるよね！」

急にイザナギ皇国に対して親近感を覚える渡。まだ見ぬ異国に対して心を膨らませる。

いきなり興奮しだした渡に少し押されつつも、エリスはさらに続けた。

「茶色とか暗い青とか。でも、たまに白い人もいるそうです。あちらの皇族の方々はみんな白髪なんだそうですよ」

「白髪ねえ。それはそれでかつこいいな！」

久しぶりの故郷を思い出してさらに興奮する渡。  
その思いを汲み取ってか、エリスは何を言うでもなくただ渡を見守る。

あれやこれやと騒ぎながら歩く渡は、周りから好奇心な目つきで見られていたが、本人は気にしないようだ。

エリスも渡が嬉しそうに叫ぶ様子を見てニコニコとした笑顔のまま渡についていく。

しかしエリスは思い出したように騒ぐ渡に話しかけた。

「あ、でもあっちの国にも髪が黒い人は人間じゃないそうですから、注意してくださいさ・・・」

エリスは忠告を言おうとしたのだが、渡の髪を見つめた笑顔のままたまる。

テンションが上がっていた渡は、少しだけテンションを落として振り向く。

笑顔のままかたまったエリスを見て、渡は不審に思わざるを得なかった。

「どしたの？」

渡がおい、とエリスの目の前で手を振っても反応はない。

頭をぽんぽんと叩いても、髪を少し引っ張ってみても瞬きをするだけで全く反応しない。

渡が諦めてはあ、とため息をついたその時。

「あーっ！」

と、エリスは突然叫んだ。

「うわっびっくりした・・・」

渡が身をすくめてびっくりすると、いきなりエリスは渡の手を掴んだ。

渡がそれに反応する前にエリスはどこかに走り出す。とても急いでいるようだ。

「ちょっと、エリス！どしたの！？」

渡の問いにも答えず、エリスは渡の手を引いて港町を疾走する。すれ違う人々に驚かれたりもしたが、エリスは全く気にしない。

そのまま走って向かった先は、港町の郊外、一軒の店の前だった。

肩でせいぜいと息をする二人だったが、エリスは少しだけ息を整えるとそのまま店に入ってしまった。

エリスに完全においていかれた渡は、エリスを追って店に入る。

店の中には魔女のような格好をした老婆が座っていた。

その老婆は冬でもないのに暖炉に火をつけ、その前で転寝うつたねをしていた。

何故か部屋の中は暑くない。暖炉では火が煌々と燃えているのに、その熱を全く感じないのだ。

「おばあちゃん！起きて！」

エリスは椅子に座って寝ていた老婆の肩をゆさゆさと揺らした。

「んん？ああ、エリスちゃんかいな・・・」

「今すぐ薬作ってください！ちょっと時間が無いんですよ！」

「なんだい・・・。ミーシャちゃんのはもう切れちゃったのかい？」

「いや、今日はミーシャさんのじゃないです！」

「じゃあ誰なんだい」

老婆はそう言ってエリスの後ろを覗く。

老婆とばつちり目が合ってしまった渡は、少しだけ頭を下げる。

「ふん！例の黒髪の野郎かいな・・・。面倒だがエリスちゃんの頼みだし・・・。」

老婆はそう言って立ち上がり、店の奥に引っ込んでしまった。その隙に渡はエリスに近寄り、ひそひそと話す。

「あのさ、ここどこ？」

「ええと、染色屋さんです」

「染色？」

「はい、布とかの染色もしてるんですけど……。今は髪を染めてもらいます」

渡はジェスチャーで、何で？と首をかしげる。

「えつとですね……。イザナギにもエルギスにも黒髪の人はいない訳ですよ。こちら辺ではワタルさんのことを皆知っているから大丈夫なんです、異国で黒髪の人がうろついていたら……」

「怪しまれる」

「そうです。脱獄の時にも目立つのはあまりよくないと思います。だから……」

「髪を染める」

渡はようやく納得したようで、手をポンと付いた。その様子にエリスもにっこりと笑う。

しかし渡は新たな疑問をエリスに投げかけた。

「さっきの、ミーシャさんのって何？」

その問いにびくつと反応するエリス。きよろきよろと目が泳ぎ、手を合わせてすりすりと擦る。

えーとか、あーとか声を出しながら、どうにかこうにか言い訳を探す。

その様子を不審に思いながら見る渡は眉をひそめた。

「あつ、気分転換ですよ！髪の色を変えて心を入れ替えるのもいいかなって言っていました！」

「ふーん。ミーシャさんて本当の髪の色は何色なの？」

エリスの言い訳は渡の純粋な疑問の下に斬り捨てられ、儚くも散った。

エリスは笑顔の形を作ったまま完全に硬直し、瞬きすらもしない。そのうち顔が、サーッと青ざめてきた。

地雷を踏んだ、と直感した渡はエリスの肩をゆすりながら言った。

「ごめん！そんなに言えない事なら言わなくていいから！顔がなんか青いぞ、おい！！」

「あ……。えと、ごめんなさい」

十数秒の硬直を経て、エリスはやっと解放される。どうやら呼吸も止まっていたようで、息を切らしている。

痛いところを突いてしまった、と渡は反省する。何か深い理由があるのだろっ、と無理矢理渡の中の好奇心を押し潰した。

そんなことをしている内に、店の奥から例の老婆の声が聞こえた。

「ほら、準備ができたよ！早く来な！」

気まずい雰囲気押し流されていた二人は、救世主の元に急ぐ。カウンターを越えた店の奥には先ほどの老婆が立っていた。その側にはどろどろとした液体が入った、まるでドラム缶のような鍋が火にかけている。しかもその鍋には何故か梯子が立てかけてあった。

「あの、それは何ですか？」

「めんどくさい若者だね！面倒な説明なんて私やしないよ！」

「これに髪の毛をいれろと入れた髪の毛の色に液体が変化するんです。それに浸かると入った人の毛もその色に染まってしまうと言ってます」

老婆に代わってエリスが苦笑交じりに説明する。

エリスは言いながらも自分の髪をプチッと一本抜き、鍋の中に入れる。

その瞬間、その鍋の中身が変色してエリスの髪の毛の銀になった。底も見えないような液体は、まるで水銀のようだ。

「さて、服脱ぎな」

老婆のいきなり的大胆発言に渡は耳を疑う。

「え・・・ええ？」

「この湯につかって全身の毛を染め上げるのさ。分かったら服脱いで入りな」

「いや・・・エリスもいますし・・・」

「わっ私は店番してますよ！」

エリスはぱたと部屋から出て行き、救いを失った渡は必死に思考を巡らせる。

しかし強気な老婆に勝てそうな言い訳も思いつかず、おろおろとするばかりだ。

見かねた老婆は不機嫌オーラをばしと飛ばしつつ、置いてあった椅子に渡に背を向けてどっかりと座った。

「早くしな！それでも私や忙しいんだ！」

渡は老婆に感謝しつつも、これ以上何か言われないうちに急いで服を脱ぐ。

ところで、渡とエリスが着ている服は、軍の制服でも普段着でもない。一応隠密行動なので軍の制服というのは論外ではあるが。

普通の制服は『魔力系<sup>まりよくし</sup>』と呼ばれる、魔力を込めた系で作られており、耐刃・耐魔法に加えて鎧よりも軽量である、という長所が上げられる。（だが防御性能は鎧等には負ける）普段着は勿論普通の系だが、渡達が着ている服の系は『加護系<sup>かじし</sup>』と呼ばれている。魔力系から派生したもので、精霊の加護によって人からあまり認知されなくなり、さらに体が少しばかり軽くなるのである。服自体にも装備者に身体強化の魔法がかけられるように小さな魔方陣が組み込んであり、外からは見えないところ（特に内側や下着）に様々な仕掛けがある。しかも魔力は大気中から集めるようになってるので装備者にも負担はない。この服は下着も含めて一着であり、身体に密



着する構造で動きやすさを追求した、芸術品と言っても過言では無い程の完成度を保っている。

しかしこの服には二つの欠点があった。

一つは防御性能。動きやすさを追求したために普段着と大差ないほどの防御性能となってしまうた。

もう一つは、

（脱ぎにくいなこれ！）

着脱がしにくい、ということである。身体に密着した構造があだとなり、こんな欠点が生まれてしまったのだ。また、様々な仕掛けは一定の手順を踏まないと解除されないようになっており、着脱のしにくさに拍車をかけている。

普段は気にならないような欠点であるが、今の渡にとっては生きるか死ぬかの大問題であった。

老婆をこれ以上怒らせないために慌てて服を脱ごうとするが、かえって焦ってしまつて脱ぐことが出来ない。それがさらに焦りを呼び、悪循環を引き起こしていた。

全く準備が出来た様子が無い渡に、老婆は忌々しげに貧乏揺すりを始める。

それすらも渡の心を揺さぶり、一層慌ててしまふ。

そんなこんなで服を脱ぐだけでも3分近くも掛かってしまった渡は、恐る恐る梯子を上って鍋の液体の温度を調べる。調度いい感じだ。

つま先からゆっくりと銀色の液体に浸かっていく。

（なんか、ドラム缶風呂みたいだな・・・）

「あの・・・入りました」

思ったことは口には出さず、とりあえず報告をする。

「チツ」

全身で不機嫌を表していた老婆は立ち上がると、側の棚からL字に曲がった筒状の物体を取り出した。

くるりと渡に振り返ると、それをずいっと押し付けてくる。

「これ啜えながら潜ってな。私がよしと言うまで」

変なものをわたされた渡は、とりあえず素直に従って筒の先端を啜えて液体の中に潜る。

感覚で言くと、そのまま風呂に潜る感じだ。だれでも幼い頃に経験があるだろう。

渡が目を瞑ったまま潜って、60を数えたがまだ合図はない。いい加減のぼせてきそうだったが、老婆はまだまだ許してはくれない。

それからまた300を数えた頃、渡の耳にようやく合図が届いた。ぼんやりした頭に加えて鍋の中なので、鍋をコンコンと叩いたただけでも頭の奥まで重く響いてくる。

渡はどうかこうにか這い上がる。粘性のある液体のため呼吸がしにくい、顔を拭って深呼吸をする。

その間にも老婆は渡の髪を触ったり、わしゃわしゃと撫で回したりしていた。

「ふむ。おかしいねえ・・・」

老婆がポツリと呟き、手で顎をさすった。

「どういふことですか？」

いくらか意識のはつきりしてきた渡は、怪訝な顔をしながら渡の髪を弄っている老婆に聞いた。

老婆は首を傾げながら答える。

「いや、普通ならお前さんの髪もはつきりと銀色に染まるはずなんだけどね……。まあ自分で見てみな」

老婆はそう言つて棚から手鏡を持つてきた。それを渡の前にかざす。

その瞬間渡の目は驚愕に見開かれた。

「なん……。じゃこりや！？」

渡の髪は灰色になっていた。

正確にはエリスの銀と渡の黒が混ざつた色である。光の当たる角度によつては鈍く光つているように見える。見方によつては白髪交じりの若者にも見える。

予想もしなかった髪の色に対して、渡はしばらく啞然としながら前髪を弄つたりいろいろな角度から自分の髪を眺めたりしていた。しばらくして老婆が渡に機嫌悪そうに声をかけた。

「そろそろいいかね。私や腕が疲れたんだが」

「あ、ごめんなさい！もういいです……」

渡は名残惜しそうに答え、老婆はさつと腕を下ろす。鏡を元の場所に戻すと、老婆は渡の目の前に戻ってきた。そして投げやりに渡に言つた。

「で、もう一回染め直すかい？それともこのままでいいかい？」

「え？どういことですか？」

「てめえはその髪でいいのかって聞いてんだよいい加減理解しないグズ！」

「いいです！」

「わかりやいいんだよ！」

半ば強引に押し切られた渡。言ってしまったてからしまった、思った渡だったが、今さら申し出ることも出来ずにがっくりと肩を落とした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3367m/>

---

不幸な少年の冒険

2011年10月6日16時32分発行